震災伝承施設の観光資源化と体験型観光におけるナラティブの形成
―宮城県南三陸町における復興過程とダークツーリズムの新展開―

河内 良彰（佛教大学社会学部）
査読論文（2025年11月20日）

本稿は、宮城県南三陸町を事例に、東日本大震災の震災遺構および震災伝承施設を中心に再形成される観光地の動向を、「ダークツーリズム」の視点で分析する。被災地観光を「被災から復興へと至るプロセス」と捉え、物理的な遺構や施設の整備に加え、体験型コンテンツによる旅行者・住民双方に与える影響や、追悼や祈りの機能にも着目し、“総合的な復興”に果たす役割を考察する。

震災遺構「南三陸町旧防災対策庁舎」は、町長のリーダーシップのもと町有化され、「南三陸町震災復興祈念公園」に保存されている。慰霊碑の建立や植樹が進められ、震災の痕跡と再生の意思を表象する空間が形成されている。「南三陸311メモリアル」は記憶と教訓を次世代に伝える場として機能し、住民の証言や関連資料を通じて防災意識の醸成に寄与している。これらの施設は旅行者と住民を繋ぐ役割を担い、精神的かつ教育的機能を果たしている。

「南三陸ホテル観洋」は震災直後から避難所や支援拠点として機能し、「高野会館」の民間震災遺構としての保存や「語り部バス」の運行、「海の見える命の森」の供用など、記憶継承と交流の場づくりに貢献している。戸倉地区においては、旧戸倉中学校を転用した「戸倉公民館」や「宇宙桜」、「五十鈴神社」などが、過去の記憶と未来への希望を繋ぐシンボルとしての機能を果たしている。

南三陸町は、物的復旧という一面的な復興に留まらず、アーカイブス化を基盤に防災・減災を念頭に置いた教育および政策の推進、アイデンティティの再構築、祈りを含む記憶承継の場を整備し、“総合的な復興”を進めている。

１．はじめに

本研究は、宮城県南三陸町に所在する震災遺構および震災伝承施設を中心に、関連する景勝地や観光名所を包括的に取り上げ、「ダークツーリズム」の発展的視座から、それらの観光地化の過程および観光資源としての特性を明らかにすることを目的とする。

2011年に発生した東日本大震災は、物理的な破壊や人的被害にとどまらず、地域社会および人々の精神的基盤に深刻な喪失をもたらした。しかし同時に、この被災経験は、郷土の再生や記憶の継承、さらには外部との新たな関係性の構築を模索する動きを生み出す契機にもなった。震災後の東北地方においては、震災遺構の保存や震災伝承施設の整備といった有形の“モノ”による記憶継承に加え、被災者による語りや交流、ワークショップ、宗教的儀礼、農林漁業体験、自然との関わりなど、無形の“コト”による実践が多様に展開されている。これら一体的な観光は、物質的復興をベースとしつつ被災者の希望の再生も促し、防災・復興インフラの整備はもとより、“感情の回復”や“関係性の再構築”に資する重要な役割を担っている。本研究は、被災地で展開されるこうした観光実践を、「被災

から復興へ」「喪失から希望へ」と至るプロセスの一環として位置付ける。また、震災遺構などの物理的モニュメントに加え、住民との対話的関係や体験的な実践に着目し、それらがいかにして旅行者と住民の双方に気づきや学び、癒し、変容をもたらし、被災地の多層的な復興に寄与しているのかを明らかにすることを範囲に含める。

本研究の視座について重要な知見を示す先行研究として、Lin et al.（2017）は、ダークツーリズムの枠を超えた希望や共創を軸とする観光スタイルを模索し、三陸沿岸部で展開される「ブルーツーリズム」の事例を取り上げた。旅行者が被災地で漁業体験を行い、被災者と交流を深める過程を通じて、住民が新たな誇りや経済的自立を獲得していく姿を描き、“見る”行為から“関わる”行為へと人々の意識や行動を変容させる契機とみている。Martini & Minca（2021）は、岩手県陸前高田市で推進されている震災後の観光を「感情の地理学（geographies of affect）」（pp.37-40）[1] の文脈で捉え、旅行者と住民が語りや催事を通じて感情的に交わる過程を論じた。特に、ナラティブ化が進む「奇跡の一本松」のモニュメントに加えて、海岸山普門寺における五百羅漢の制作プロジェクトに記憶や感情、追悼が交差する場面が見られることから、心理的ケアや内面的な癒しの機会を被災者らに提供するとともに、こうした“感情のダークツーリズム”が街の復興プロセスにも関与する力があることを指摘している。Tan et al.（2022）は、2004 年 12 月のスマトラ沖地震に伴う大津波により 16 万人を超える死者・行方不明者を出したインドネシア・アチェを挙げて、自然災害後における観光と宗教との関係性に着目し、被災者が祈りや儀礼を通じて観光事業を担い、このような住民による旅行者への歓待を両者が精神的共同性を形成する過程として把握した。彼らの研究は、経済的収入源となるだけでなく、宗教的価値の再認識や教育的実践の場としても機能しうる観光の意義を示唆するものである。

加えて、Kato（2022）は、岩手県田野畑村の「サッパ船アドベンチャーズ」など同県沿岸部の活動例を通じて、自然との共生や世代を超えて継承されてきた実践や価値観を意味する伝統的生態知識（TEK）が果たす意義について考察した。被災地の観光開発に TEK の概念を取り入れることで、伝統や文化的特性の再評価、レジリエンスの構築が進み、持続可能な社会への移行が促されることに言及している。井出（2010 b）は、災害後の初期段階（1000 時間）を過ぎた後に、被災者の関心が生命の維持から社会的回復へと移行することに注目し、参加型・体験型ミュージアムの意義を論じている。災害を語る力や地域文化への再接続を通じて、被災者のアイデンティティの再構築に貢献する観光の可能性を指摘している。住民参加の仕組みや専門家の関与、土地に根ざした文化や生活様式と密接に関係するコンテンツ、被災体験や体験型プログラムを観光資源として活用することは、被災地の住民が郷土文化を見つめ直すことにつながる。こうした取り組みが旅行者の関心を高めて持続的な来訪の動機付けとなり、災害復興からより望ましい社会の形成に資する側面に注目している（井出 2010 a）。これらの研究に共通して見られる視点は、観光が単に経済的・インフラ的な復興に資するにとどまらず、被災地の人間関係や感情、文化、宗教、倫理といった非物質的側面を含む「関係性の実践」を促進するという点である。この種の観光実践は、旅行者に対しては被災者や住民の経験に対する内面的共感を促し、自己認識の

変容を導くとともに、住民に対しては自身の被災体験を語り直す機会を提供することで、被災地に内在する多様な価値の再認識を喚起する役割を担っている。

本研究は、震災遺構に代表される物理的遺構の展示といった従来のダークツーリズムに見られる要素に加え、それらに関する被災者の語りや記憶の共有といった参与的実践にも着目する。そのうえで、体験型観光や教育・研修プログラム、芸術活動、宗教的儀礼といった実践をも含め、多層的かつ参加型の観光のあり方を、被災地の復興のプロセスで包括的に検討する点に独自性が認められる。被災地において、社会的・文化的側面を含む“総合的な復興”がいかに進められているのか、またどのような取り組みやプロセスを通じて“希望のナラティブ”が構築されているのかを明らかにする。具体的な事例分析を通じて、喪失の記憶に対峙しつつ未来を再構想する手段となる観光の可能性を検討し、観光を通じた復興に関する新たな理論的枠組みの構築を将来的な課題とするとともに、ダークツーリズム研究における概念的枠組みの拡張に資することを視野に入れている。

なお、本研究の対象は、津波や地震などの自然災害によって直接的に生み出された「物理的な遺構・遺物」と「物理的な遺構・遺物に関する記録と語り部の記憶」である（河内2024）。2022 年 2 月 19 日、2025 年 6 月 9 日から 19 日まで南三陸町で現地調査を実施し、震災遺構と震災伝承施設を把握すべく実地に踏査した。本事例は、「ダークツーリズムスペクトル」（Stone, 2006）の第 1 スペクトル（3-(1)-ⅲ、3-(2)-ⅰ、3-(2)-ⅲ、3-(3)-ⅰ、3-(3)-ⅲ、3-(4)-ⅱ、3-(4)-ⅲ）、第 2 スペクトル（3-(2)-ⅱ、3-(3)-ⅱ、3-(4)-ⅰ）、第 4 スペクトル（3-(1)-ⅱ）、第 5 スペクトル（3-(1)-ⅰ）に該当すると考えられる。

２．宮城県南三陸町の被災状況と復興過程

宮城県南三陸町は、県の北東部に位置し、太平洋に面した三陸海岸南部に所在する自治体である。地形的には典型的なリアス式海岸を有し、「志津川湾」を中心に海岸線に沿った狭隘な低地や谷間に市街地を形成してきた。このような地理的特性は、美しい海洋景観や山海にわたる豊かな景観資源を生み出し、漁業を基幹産業とする地域形成に寄与してきた。震災後、沿岸部一帯は「三陸復興国立公園」に指定され、自然的・文化的資源を活用した復興を推進している。特に観光振興に関しては、海洋および山岳の自然環境の調和、ならびに豊かな漁業資源を中核とした持続可能な地域社会の構築を進めている[(2)]。

震災後の志津川地区中心部は、造成工事により地盤が海抜約 10m までかさ上げされ、その上に新たな市街地の整備を段階的に進めている。復興の基本理念を「『自然・ひと・なりわいが紡ぐ安らぎと賑わいのあるまち』への創造的復興」と定め、震災前の状態に回復するだけの復興でなく、成熟社会を取り巻く諸課題に対応させた新たなまちづくり「創造的復興」を目指している。この町で再び生活することを願う町民が安心と希望を持って復興に取り組めるように、町に関わる全ての人々の力を結集し実現しようとする決意を込めている。復興目標は、第 1 に安心して暮らし続けられるまちづくり、第 2 に自然と共生するまちづくり、第 3 になりわいと賑わいのまちづくりの 3 点で、そのために、(1) 町と地域

が力を合わせ協働で取り組むまちづくり、(2) 町の主体性を堅持し国・県と連携して進めるまちづくり、という 2 つの方策を掲げている（南三陸町 2024、pp.68-69)。

2011 年 3 月 11 日、志津川と歌津の両地区で震度 6 弱を観測し、人的被害では死者は 620 人（うち関連死 20 人)、行方不明者は 211 人に上り、建物被害（住家）では全壊は 3143 戸（2011 年 2 月末時点の住民基本台帳世帯数の 58.62%）に及んだ（同、pp.38-39)。津波によって市街地の大部分を失った同町は、震災後の土地利用を大きく見直し、「なりわいの場所は様々であっても、住まいは高台に」を基本に、より安全な暮らしと活力ある産業の構築に向けた新たなまちづくりを進めてきた（図 1)。その方向性に関する具体的な施策として、住宅や公共施設の高台配置、避難路・避難場所・避難施設の整備、防潮堤の整備、新産業の創出と外部企業の誘致、基幹漁港への集中投資、旅行者にとって利便性の高い観光用地の確保、安全かつ機能的な町道の整備などを挙げている（同、pp.72-73)。

南三陸町は 2022 年 10 月、経済復興の拠点施設として 2017 年 3 月に本設オープンした「南三陸さんさん商店街」の隣接地に、「道の駅・さんさん南三陸」を開設した。南三陸町東日本大震災伝承館「南三陸 311 メモリアル」、観光案内所・交流施設「南三陸ポータルセンター」を併設し、設計・デザインを手がけた世界的建築家、隈研吾氏の世界観が息づく空間を堪能できる。JR 東日本の気仙沼線 BRT の志津川駅などの施設も隣接し、南三陸町を観光する際はこの道の駅を起点とすることができる。

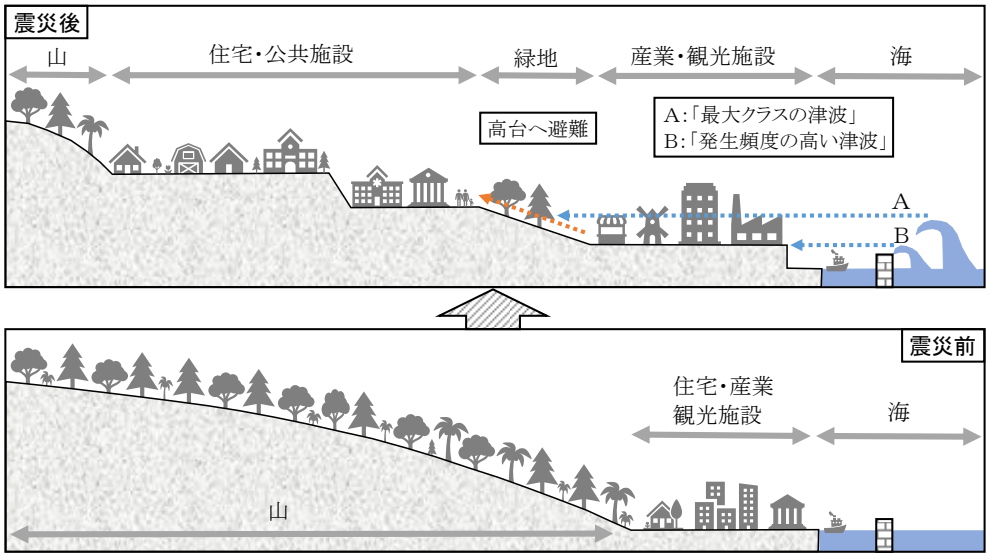

図 1　南三陸町におけるまちづくりの断面イメージ

（資料）南三陸町（2024）73 頁掲載図より筆者作成。

3．調査結果

(1) 南三陸町震災復興祈念公園における被災から復興への移行過程

i) 震災遺構「南三陸町旧防災対策庁舎」

南三陸さんさん商店街より、西側を南北に流れる「八幡川」を架橋する「中橋」を渡っ

た先に、6.3 haの面積を有する「南三陸町震災復興祈念公園」（宮城 第 2-027 号）を整備し、園内に震災遺構「南三陸町旧防災対策庁舎」を保存している[3]。発災直後、町職員と近隣住民ら計 54 人がこの建物の屋上（海抜約 12m）を中心に避難したが、平均津波高 16.5m（旧庁舎地点の津波高は 15.5m）の津波により、うち 43 人が死亡または行方不明となった[4]。当時の状況を可視化するため、筆者が 2025 年 6 月 15 日に撮影した写真をもとに、当時の 3 階建ての間取りと計 11 人の生存者・生還者の避難位置を図 2 に示した。すべてが失われた周辺一帯は広大な公園として整備され、その痕跡を唯一とどめる構造物として現存している。一面が芝生で覆われた「語り継ぎの広場」に残された旧庁舎は、外壁や内装がすべて流失し、鉄骨のみが原形をとどめた状態で保全・管理されている。

防災システム研究所所長の山村武彦氏は、屋上に避難し生存した佐藤仁・町長を含む 11 人を「奇跡のイレブン」と称し、そのうち 10 人に対して詳細なインタビュー調査を実施し、その成果を一書にまとめている（山村 2017）。同書によれば、多くの命が失われた現場であることから、犠牲者の無念や遺族の深い悲しみを象徴する存在にもなっており、その保存には紆余曲折を経ることとなった。保存の経緯を「愛憎を背負う防災庁舎」（同、pp.192-195）の節題で紹介し、地震規模および津波高の過小評価に基づく被害想定、その誤差が明記されてこなかった日本の地震モデルに対する問題提起の伏線としても位置付けている。佐藤町長は震災後、旧庁舎の保存に前向きな姿勢を示していたが、その後に「遺構の保存は小さな町には荷の重すぎる問題」との見解を示し、当初の方針を転換して解体の意向を表明した。しかし、復興庁が「被災自治体 1 か所につき 1 施設」に限り震災遺構の保存を支援する方針を打ち出したことにより、保存・解体の是非をめぐる議論は再び活性化した。宮城県は 2014 年 1 月、旧庁舎を解体事務委託の対象から除外するよう南三陸町に要請し、さらに県の有識者会議は 2015 年 1 月、村井嘉浩・知事に対して震災遺構に関する最終報告書を提出し、旧庁舎を「県内の震災遺構の中でも特段に高い価値がある」と評価した。県の要請と住民感情との狭間で対応に苦慮することとなったが、遠藤健治・副町長がパブリックコメントの実施を提案し、2015 年 4 月 1 日から 5 月 8 日にかけて、「県からの提案事項に対し、町としてどのように対応すべきか」について住民の意見を募った。その結果、664 件（有効回答数 588 件）の意見が寄せられ、県の提案への賛成意見が 350 件（59.5%）、反対意見が 206 件（35.0%）となった。こうして、町議会は全会一致で県の提案を受け入れることを決定し、旧庁舎は 2031 年 3 月までの 20 年間にわたり県の管理下に置かれることとなった。2015 年 12 月より県が所有し、国の交付金などを活用して、総額約 9700 万円を投じて耐震補強や防錆塗装等の維持管理を進めてきた。

2024 年 3 月 1 日、佐藤町長は「あの場所で生き延びた者としてこの 13 年間、心の真ん中にずっとあった。この問題は自分自身の責任。自分の代でケリをつけるのが大事だと思ってきた」と自らの政治決断であることを強調し、旧庁舎の所有・管理を県から引き継ぎ、町有に戻して震災遺構として保存することを表明した[5]。「想定以上の自然災害が起きたことを見てもらい、防災、減災に役立てたい」との町長の強い意思により、伝承活動に資するべく 2024 年 7 月 1 日付で旧庁舎の町有化を果たした[6]。

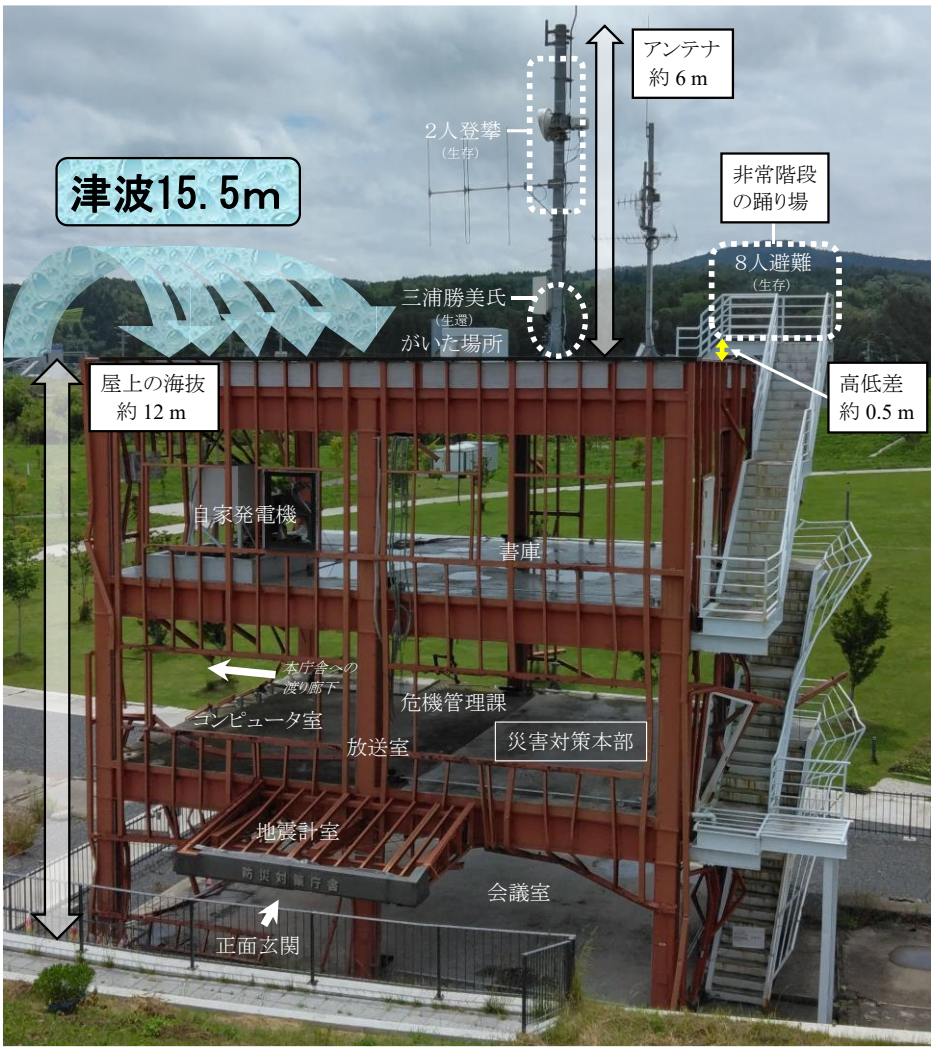

図 2　南三陸町旧防災対策庁舎

（資料）河北新報（2021 年 2 月 21 日）「ドキュメント防災庁舎　震災 10 年
南三陸 11 人の証言　①激震　14:46」『河北新報』1 面の内容を基に筆者作成。

建物内部では野鳥の鳴き声が響き、小動物が行き交う姿も見られるなど、震災の記憶と自然の静寂が共存する空間となっている。後述の中橋が架橋されている場所から 62 段の階段を下りた地点が旧庁舎の 1 階部分に相当し、震災当時に町中心部にあった建物周辺の海抜を体感できる。建物の北側に取り付けられた屋外の非常階段には、3 階まで続く金属製の支柱が今も残り、スチールパイプが無残にも北方向へねじれ、波の力がいかに凄まじかったかを物語る。何トンもの鋼材がアルミ箔のようにねじれた様子は、言葉を失うほどの迫力があり、自然の猛威に対する人間の無力さを突きつける。

祈りの丘との接点である「復興祈念のテラス」は、震災の記憶を風化させずに未来へとつなぐ祈りと希望の場所である。築山の頂上と志津川の新市街地を結ぶ軸線上に設けられた石碑には、当時小学 1 年生だった人物の記憶と祈り[(7)]が克明に刻まれ、個人の記憶を超えて多くの被災者の思いを代弁し、再び活気と笑顔にあふれる町になることを願うものである。言葉が見守る先に旧庁舎が位置し、100mほど先に小さく佇む震災遺構がかつての

惨状を沈黙の中で語り、芝生越しに見る碑文が未来に向けて前進しようとする住民の確固たる意思を感じさせる。災害の記憶を受け止めながらもそれに縛られず、そこから学び、力強く乗り越えようとする人間を体現する。幼い日の記憶と今をつなぐ言葉がレジリエンスと希望を象徴し、町の復興に向けた決意表明となっている。

上山八幡宮の禰宜、工藤真弓氏は、整備前の同公園エリアについて、容易に訪れることのできない場所、時間が止まった過去の地として捉えていた。しかし、2020 年 12 月に全域開園して中橋を渡った際、かつての印象とは全く異なる空間へと変容したことを実感したという。久しぶりに旧庁舎を訪れた際には、そこに雀が巣を構え囀りで迎えてくれた経験から、「生命のあるものと一緒に、いまここに過去が存在している」という感覚を抱いた。このことから、同氏はこのエリアを、未来に向かって歩みを進めるための常に新たな場、「今日一日の生き方を誓う場所」と見なしている（石井山編 2021、p.10）。

ⅱ）祈りの丘および名簿安置の碑

復興祈念のテラスから 71 段の階段を上がると、築山である「祈りの丘」の中腹に設けられた「高さのみち」（海抜約 16.5m）に至り、そこからは緩やかなスロープを歩く。一般社団法人全国優良石材店の会の寄贈による石碑「伝えつなぐ大津波　2011.3.11」を頂部（海抜約 20m）に建立しており、東日本大震災の発生日時や震源地のほか、最大震度 6 弱（志津川地区）、津波浸水高 16.5m（同）、死者・行方不明者 831 人という町内の被害状況を記録している[8]。献花台とともに津波が滑り降りる軌道を示すかのような傾斜のついた「名簿安置の碑」には、「いま、碧き海に祈る　愛するあなた　安らかなれと」と刻印し、犠牲者名簿を安置している。この高台から創意を尽くし、旧庁舎と志津川湾、直線距離で約 2 ㎞南東方向に位置する「荒島」[9] に視線を導いている。

この丘の顕著な特徴は、中腹に至るための経路としてスロープ（記憶のみち）を通る場合と、71 段の階段を上る場合の 2 つの方法を比較できる点にあるといってよい。前者の場合は約 3 分を要し、途中に道路上に埋め込まれた金属製のプレートを確認しながら進む。2011 年 3 月 11 日の 14 時 46 分の発災から、15 時 35 分頃の津波襲来までの時間経過を距離に対応させており、順を追って 14 時 49 分の 6m の大津波警報発令（気象庁）、15 時 10 分頃の志津川湾における引き潮の派生、15 時 14 分の 10m 以上の大津波警報発令（気象庁）を伝えている。引き続き、15 時 25 分の第 1 波の到来と防波堤の乗り越え、15 時 28 分の八幡川の防潮水門の乗り越え、15 時 30 分頃の市街地における建物の流失開始、15 時 35 分頃の巨大津波の襲来による市街地の壊滅までを示している。他方、後者を選択した場合、所要時間が 1 分に過ぎないという事実は重要な意味を持つ。適切な津波避難行動として、海岸線から陸地の奥へ移動するのではなく、事前の情報把握に基づく標高の高い避難場所へ迅速に移動することの重要性について、体験を通じて理解を深められる。

ⅲ）みらいの森

「みらいの森」は、自然災害によって命を落とした御霊を鎮めるとともに、自然の復元

力や復興に尽力する人々の姿を、樹木の生長と重ね合わせて象徴的に表現する空間である。本エリアは、人間の営みとそれを包摂する自然環境との調和を志向する町の未来像を具現化したものである。空間構成としては、直径約 30mの円形にコンクリート舗装を施し、その弧に沿ってベンチを設置している。これにより、住民や旅行者が周辺エリアの散策の合間に立ち寄る憩いの場としての機能も果たしている。また、周囲には生命の息吹や自然環境を想起させる常緑広葉樹を植えており、来訪者に樹木に囲まれた環境の中で安らぎの時間を過ごしてもらえる。中心には町木であるタブノキを 43 本植樹し、ヤマモミジやヤブツバキなどを含む合計 100 本以上の樹木を配置している。これらに加えて、園路やベンチも整備しており、森林的空間としての機能と利用者の利便性を両立させている。

これらの木々は、夏季の強い日差しの中で一定の木陰を提供することが期待される樹種であり、将来的には快適な休息空間を生み出すことが想定される。しかし、2020 年頃に本格的な植樹が行われたばかりで樹高はまだ低く、現在の段階では“森林”と呼ぶには規模も成熟度も十分とはいえない[10]。快晴時において日差しが強い日には、休憩スペースとしての機能において改善の余地が認められる。それでも、配された木々は、最終的に 30m 以上の高さに成長する常緑高木であり、今後数十年をかけて本格的な森林空間へと成長していくことが期待される。みらいの森という名称がこの場所に与えられているが、近い将来にその名にふさわしい環境が形成される可能性は高い。この整備された空間は、震災からの復興が短期的な支援では完結しえないこと、そして長期的な視点と継続的な努力が不可欠であることを示唆している。被災者や住民、支援者による日々の手入れと管理があってこそ、このような空間の維持と発展が可能であり、この町の復興の象徴的な存在としての役割を長期的に果たす空間となっていくに違いない。

（2）道の駅・さんさん南三陸と周辺施設における観光実践とナラティブの形成

ｉ）中橋

中橋は、構造形式として上部構造が鋼単純パイプトラス橋（ダブルデッキ床版形式）、下部構造が逆 T 式橋台（場所打ち杭基礎）の橋長 80.6mの歩道橋である。震災以前にこの場所に架橋されていた木造の橋を想起させるために、ダブルウッドデッキの太鼓橋として 2020 年 9 月に完工した。隈研吾氏が設計に携わり、橋と景色の親和性を高めるために円形の鋼パイプを使って部材を溶接で接合し、ウッドデッキには南三陸杉をふんだんに用いて木の温もりを感じられる空間に仕上げた。南三陸の海・山・空の雄大な風景を五感で味わえるようにデザインし、夜になると橋全体をライトに照らして幻想的な雰囲気を醸し出す。橋梁工学において優れた特色を有し、設計・施工技術の発展に大きく貢献したと認められたことにより、2020 年度の公益財団法人土木学会田中賞を受賞した。

床板として採用されている地場産の木目が映える無垢材は、長さ 300cm、幅 11cm、厚さ 4cm 程度の仕様（下側のウッドデッキ）で、特に床板厚に着目することで運営構造のボトルネックを否が応でも意識させられる。一般に、木材を用いた歩道橋は、鉄鋼材やコンクリート、FRP（繊維強化プラスチック）といった現代的建材と比べて、景観性および自然環

境との親和性において優位性を有する。一方で、耐久性や耐候性に劣り、定期的な点検、防腐処理、塗装、部材の交換など、維持管理に係るコストが高くなる傾向がある。にもかかわらず、木材が主要な建材として選定された点については、構造的合理性のみならず、象徴的・文化的意義が強く関係していると見られる。すなわち、この橋が建設された場所は、東日本大震災の津波によって大部分が失われた市街地エリアの中心部に該当する。こうした場所で耐久性の面で課題を抱える木材をあえて採用したという選択は、単に景観設計上の判断に留まらず、震災の記憶を喚起し、住民や旅行者に対して日常的に災害の記憶を継承させるという社会的・教育的意図が込められていると解釈できる。

交通インフラとしての機能を果たすと同時に、人々が震災の痕跡と向き合い続けるための象徴的構造物として、この橋自体が南三陸町のメモリアル・スペースとしての役割を担っていることがわかる。道の駅・さんさん南三陸から震災復興祈念公園へ向かうための導線上の構成要素ではなく、駅や商店街、公園を構成する要素の一部、あるいはひとつの主たる目的地と見なし、構造的特性および設置環境に関する十分な認識を持ち、足元の状況を適切に把握しながら慎重に歩行を進める必要がある。

ⅱ）南三陸町東日本大震災伝承館「南三陸 311 メモリアル」

気仙沼線 BRT の志津川駅前の南三陸町観光協会が管理運営する「南三陸ポータルセンター」内に、南三陸町東日本大震災伝承館「南三陸 311 メモリアル」（宮城 第 3-029 号）がある。既述した中橋の設計を含めて 2013 年から町のグランドデザインを担当した隈氏は、10mのかさ上げ工事と大堤防の造成によって海から切り離された大地をつなぎ直し、ウォーカブルで温かい街の再生、ストリート性と木（南三陸杉）をテーマに、再建を模索した。その集大成となる当該施設は、海を眺望するさんさん商店街と海と直行する中橋の両軸線を縫い合わし、海と山、そして川と街をひとつの「輪＝リング」としてつなげ、街と人がこの輪を通じて響き合う状態を作り上げるべく設計されたものである。

エントランス部分とみんなの広場では、町の被害状況に関するパネル展示が目を引く構成となっている。旧防災対策庁舎に雪が降り積もる情景を捉えた写真を大判で展示し、人的被害や建物被害、水産業や農業の被害などを詳しくまとめている。当時の 1 万 7666 人の町民のうち 9753 人が 1 次避難を余儀なくされたことや、同じく 5845 人が応急仮設住宅での生活を強いられたことを取り上げている。高台移転の決断や医療・福祉の再生、商工業および農林水産業の復興などについても主要な出来事を年表に整理している。「未来の災害」と題する壁面を用いたミューラル展示では、これまでに発生した大津波の津波浸水域と津波高を比較するインフォグラフィック展示が示唆に富む。東日本大震災の津波高は、過去の大津波のものと比較して著しく高く、その浸水域も広範囲に及んだことを伝えている。また、寄付者の氏名を壁面に記し、「わかるとは変わること」という言葉を床面に掲げている。隣接するスペースには、1979 年当時の志津川小学校の野球少年たちのモノクロ写真を数多く展示し、震災以前の暮らしの記憶が風景の中に滲んでいる。被災の記録にとどまらず、震災後のまちづくりにおいて、住民一人ひとりがまちに息を吹き込む担い手であ

るという主体性と希望を、強いメッセージ性をもって提示するものである。

写真家の浅田政志氏は、「みんなで南三陸」と題する作品 20 点を展示し、町役場や企業・団体における集合写真を中心に安堵の表情を集めている。津波で多くを失った住民にとって、喪失のどん底から日常を取り戻すための過程は筆舌に尽くしがたいものであったが、「この町から笑顔が失われることはなかった」。互いを思い合い、助け合う人と人とのつながりがあったからこそ、苦難を乗り越えられたことを強調し、同館に展示してある作品群を「困難の時を乗り越えてきた私たちの貴重な記録」と呼んでいる。一例として、「一生懸命、前向きに～佐藤家のみんな～」（2016 年 1 月 23 日撮影）と題する作品は、佐藤町長とその家族を写した写真で、東北楽天ゴールデンイーグルスのブルゾンを着て右手に記念ボールをもった町長と、家族 5 人の柔らかな表情を捉えている。自宅が津波に流された中、家族とともに「自力更生」と記された墨蹟を掲げ、野球の全国大会に出場した際の記念ボールが手元に戻ってきたことを告げている[11]。

一番奥の展示エリアには、震災前の 2009 年 6 月に撮影された志津川地区の大版の航空写真を展示している。また、一般社団法人「復興みなさん会」が 2023 年に制作した色彩豊かな手書き地図『志津川なつかしマップ』を配置している。かつての同地区の街並みを思い出とともに描いた地図によると、数えきれないほどの建物やスポットが見られた中、一例として「町のニュースはここから発信」とキャプションを添えた上山緑地公園の南方にあった〈城洋新聞社〉、「正座して食べる駄菓子屋さん」として旧庁舎の西方にあった〈森田商店〉、民間震災遺構「高野会館」の南東において「モアイ像」の展示で知られていた〈松原公園〉などを把握する。このように震災前の街並みの把握は、懐古的行為にとどまるものではなく、住民の生活史や記憶の継承、被害の実相への理解、将来の災害への備えといった観点から、震災伝承における中核的役割を担っている。特に、南三陸町のように市街地が壊滅的な被害を受けた自治体では、〈かつてそこにあったもの〉を可視化すること自体が尊い記録であり、未来を守る力となる。その横には、震災直後より行方不明者の捜索に当たったオーストラリア緊急援助隊から友情の証として贈られたヘルメットと楯を飾っている。さらに、ウォールグラフィックでは津波から命を守るための方法、逃げる場所と経路、自分の命を最優先にした「率先避難」について教えるほか、津波のメカニズムとその危険性を理解するための映像（4 分 39 秒）を繰り返し上映している。津波に関する知識を深めるために、津波が発生する仕組み、水深や海底の地形が津波の高さに与える影響、津波の速度と水深との関係性、高波と津波の違いなどについての解説も見られる。

なお、館内と外構には、東京藝術大学「癒しのコンテンツ開発プロジェクト」による絵画作品などを飾っている。隈研吾建築都市設計事務所から依頼を受けた伊東順二・COI 拠点特任教授が、若いアーティストたちと被災地に思いを寄せて作り上げたものである。とりわけ、屋外から当館を望んだ際にひときわ目を引くモニュメントである『ぬくもり』と題する大型のウサギ型ソファは、東京藝術大学美術学部共通工房金工機械室に所属する石村大地氏によって制作された作品である。本作には鍛金技法およびラップ塗装が用いられており、アルミニウム板材を細かく切断した上で、各パーツの形状を精緻に整合させ、溶

接によって一体化させた造形作品として優れた仕上がりを見せている。

南三陸 311 メモリアルアーカイブスでは、震災に関する住民の証言、写真、映像等の資料を継続的に収集・保存している。これらの資料をもとに制作されたバナーや証言映像のダイジェスト版を、施設内の展示ギャラリーで視聴できる。中でも有料ゾーンの展示ギャラリー[12]では、甚大な被害と多数の犠牲者を出した「南三陸町防災対策庁舎」に関する展示に多くのスペースを充てており、その重要性の高さを示している。当該施設で提示されている教訓は、今後も決して風化することのない、防災・減災分野における普遍的かつ本質的なテーマに位置付けられる。本項では、「公立志津川病院」「高野会館」「山形県庄内町」「南三陸署」の各事例に関連するエピソードを取り上げ、それぞれの状況や対応を概観する。そのうえで、旧庁舎における発災時の津波避難行動を明らかにし、将来発生し得る自然災害に備え、一人でも多くの命を守るための総合的な対応策の検討を目的とする。

当時の公立志津川病院は、4 階建ての旧館と 5 階建ての新館から構成され、高齢で歩行困難な入院患者を数多く抱えていた。初期の津波予測で津波高が最大 6mとされたため、職員の間で「3 階以上に避難すれば安全だ」という認識が共有されたが、その後の津波警報が 10mに引き上げられ、間もなくして志津川地区に 16mに達する大津波が襲来した。この津波により、一部の入院患者がベッドごと流されるなど甚大な被害を受け、入院患者 109 人のうち 63 人、および職員 4 人が犠牲となり、津波の収束後に入院患者 7 人が低体温症および低酸素症により死亡したと報告されている。津波の襲来後も余震が続き、夜間の寒冷な状況下で、職員たちはずぶ濡れとなった生存者や避難者の命を守るべく、「手をつないで」「立ち上がって」などと声をかけ続けたという話を伝えている。

同時間帯において、公立志津川病院の近隣に位置していた高野会館もまた、大津波の襲来を受けることとなり、327 人の避難者が恐怖と不安の中で一夜を過ごしたという記録を残している。詳細は後述するが、発災当日、同館では町の社会福祉協議会が主催する芸能発表会が開催されており、約 300 人が参加し、歌や踊りなど日頃の練習の成果を披露していた。一連の演目が終了し、閉会式の最中に地震が発生し、会場は一時的な混乱状態に陥った。津波警報の発令とともに、近隣住民も津波避難ビルに指定されていた同館へ避難してきた。10 人程度の社会福祉協議会職員および会館職員は、屋上への避難誘導を迅速に行い、防火扉を閉めて浸水からの保全を図った。閉扉直前、最後尾に位置していた職員は、押し寄せた津波により身体が濡れるほどの状況であり、間一髪の避難であったことを報告している。屋上から周囲を見渡すと、一帯は濁流に覆われ、まるで海のような光景が広がっていた。さらに高所にある機械室への避難を試みたが通路の柵には鍵がかかっていたため、職員たちは自ら柵を乗り越え、避難者一人ひとりを抱きかかえて柵越しに誘導するという対応を取った。同館の屋上に避難した計 327 人は、繰り返し押し寄せる津波と余震の中、立ったままの状態で一夜を過ごした。深夜には「1 時だぞ、みんな元気か」などと互いに声を掛け合い、励まし合う声が館内に響いていたという。翌朝になっても津波警報は解除されていなかったが、避難者のうち歩行可能な者は自力で階段を降り、高台の避難所を目指して移動を開始し、結果的に同館に避難した全員が無事であった。なお、関連資料に

は公立志津川病院側から撮影された写真あり、津波が同館 3 階にまで到達した様子を確認できる。また、翌朝に同館から瓦礫の中を力強く歩き出す住民の姿も収めている。

震災発生後、山形県庄内町は迅速に救援活動を展開し、その人道的配慮と高い連帯意識が被災地住民に深い感銘を与えた。庄内町と南三陸町は、かねてより友好町盟約書を交わしており、災害時の相互応援協定も締結していた。この協定に基づき、庄内町は震災発生から 2 日後の 2011 年 3 月 13 日朝、先遣救護隊を派遣し、毛布 50 枚、肌着 50 組、水などの緊急支援物資を届けた。町長および副町長と面会のうえ、必要とされる物資の聞き取りを実施し、翌 14 日より本格的な支援活動を開始した。庄内町は毎日、4 トントラック 2 台に水やおにぎり、無洗米などの物資を積載し、片道 5 時間以上を要する道のりをかけて物資支援を行った。3 月末まで凍結した山道を通って日々物資を搬送し、最終的に約 10 万個のおにぎりと 1 トンの水を提供したという実績を記録している。こうした緊急的支援が一段落すると、庄内町および同町社会福祉協議会は、「南三陸町復興支援災害ボランティア」を立ち上げ、「心の支えになろう」を合言葉に、バスを利用したボランティア派遣活動を展開した。また、住民を庄内町に招待するなど、被災地との継続的な交流活動を推進した。このような迅速かつ的確な支援の実現には、町民間で構築されてきた交流関係の蓄積が基盤として存在していたことが示唆される。また、相互理解と信頼に基づいて締結された事前協定が、震災発生時において実質的な機能を果たしたものと評価される。支援の記録としては、庄内町から到着したトラックや食料の入った段ボール箱が積み上げられた様子、南三陸町で炊き出し支援に従事する当時の原田真樹・町長および富樫透・町議会議長の姿を捉えた写真などを掲示している。これらの資料は、庄内町が文字通り“町を挙げて”の支援活動に取り組んだ事実を明確に示すものである。

現在の南三陸町では、真新しい住宅や公共施設、店舗、工場などが整然と並び、計画的に整備された街並みが広がっている。巨大な防潮堤や河川堤防が新たな海岸線の景観を形作り、町の復興の象徴ともいえる存在となっている。物理的インフラの整備により、震災の痕跡を町の風景から見出すことは困難になりつつあるが、生命と希望を守る“防壁”に焦点を当てている点は注目に値する。震災から時間的距離を置いた現在、地道に継続されている活動として、警察による行方不明者の捜索が挙げられる。同町では、いまだに 211 人の行方が判明しておらず、家族がその帰りを待ち続けている。たとえ景観が変容しようとも、消息を絶った家族への「どこにいるの」「早く帰ってきて」という呼びかけは、被災者個人の心情を超えて共同体の記憶と喪失の継続性を象徴し、時間の経過にもかかわらず風化していない。宮城県警は行方不明者の捜索活動を続けており、特に月命日に漂着物に関する情報が寄せられた海岸線を中心に、南三陸警察署の署員が砂や石、流木などを鳶口や素手でかき分けながら、丁寧に手がかりを探している。「一つでも多くの手がかりを見つけ、家族の思いに応えたい」という強い信念のもと、黙祷を捧げながら懸命に捜索を続け、そうした姿が家族の帰りを待ち続ける住民たちの心の支えとなっている[(13)]。

最後に、この伝承施設の核心部分といえる、旧防災対策庁舎における津波襲来時のエピソードを明らかにする[(14)]。この建物は、1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災

（震度 7）を教訓に、同年に旧志津川町によって旧本庁舎隣接地に鉄骨造で建てられたものである。また、1960 年 5 月に発生したチリ地震の遠地津波において、町中心部の旧本庁舎の津波浸水高が 2.4mに達したことも考慮し、2 階に監視モニターと非常通信設備、3 階に自家発電設備を設置し、災害時の指令拠点としての機能を担うよう設計した。東日本大震災発生時には、旧庁舎内で業務に当たっていた危機管理課の職員が、防災無線で住民に高台避難を繰り返し呼びかけた。地震直後に発表された津波警報の予測によると、当初は 6mの津波高であったが、15 時 14 分に 10mの津波高に修正された。これを受けて、町長や防災担当職員を含む行政関係者も屋上への避難を開始した。15 時 25 分頃に津波が志津川漁港に到達し、15 時 33 分に約 15.5mの津波が旧庁舎を完全にのみ込んだ。建物の側壁はすべて剥ぎ取られ、構造フレームが露出した構造物が濁流の中から現れたのは、2 分後のことであった。屋上の非常階段の踊り場[15]にいた 8 人、アンテナ（高さ約 6m）に登って津波の直撃を免れた 2 人、屋上から津波に流されながらも自力で泳ぎ生還した 1 人[16]を除き、旧庁舎に避難した職員および住民ら計 43 人が犠牲となった。

館内には､津波の激流が屋上部分に押し寄せる直前の様子を捉えた写真を展示している。その視覚的インパクトを伴う写真を一眼レフカメラで午後 3 時 34 分に撮影した当時企画課の加藤信男氏は、撮影直後に津波に足を取られて転倒し流されたが、当時の遠藤副町長が彼の胸元をしっかりと保持し続けたため、強大な衝撃圧および水圧に耐え抜き、かろうじて命を取り留めたという逸話を残している。関連映像として、屋上で津波にのまれながらも九死に一生を得た遠藤副町長の体験をまとめた、約 6 分 30 秒の記録動画が存在する。この映像によれば、震災発生時、旧庁舎には町職員や住民ら計 54 人が避難していたが、当時の津波対応の詳細については、いまだ全容が明らかになっていない。震災発生直後、庁舎内では佐藤町長が定例議会の閉会挨拶を行っており、その場には町職員のほか、報道関係者や警察官、消防署員、県職員なども居合わせていた。発災後、彼らの多くは屋上へ急いで避難したとされ、ほどなくして津波の第一波が庁舎を直撃し、建物は海中に没した。副町長も津波にのまれて水中に取り込まれ、呼吸困難に陥ったが、身体を一度反らせることでかろうじて水面に浮上することができたという。その時点で、すでに海水を飲み込んでいた状態であった。特に、津波の押し波よりも引き波の勢いが強く、階段の格子に足を絡めて必死にふみとどまったと証言している。幸いにも、屋上まで瓦礫や構造物の破片が大量に到達することはなく、それが命を守る一因となったと回想している。やがて最大波が引いた後、副町長が周囲を見回したところ、ともに避難した人々の姿が確認できず、その状況を目の当たりにして茫然自失となり、何が起きたのかを直ちに理解することができなかったという。極度の混乱状態にありながらも､「一度助かった命だからこそ、絶対に生き延びよう」との強い意志が湧き上がり、後続波が襲来するたびに、屋上に設置されていたアンテナによじ登ってしのいだと述懐している。もっとも、この柱は登攀を目的として設計されたものではなく、加えて全身が濡れていたために著しく体温が低下し、手も出血のために滑りやすい状態であった。にもかかわらず、3 回または 4 回の試行の末、アンテナの上部に登れるようになったと語っている。津波が収まり水位が下がった後、生存が確

認された屋上の 10 人は全身が濡れた状態で体温を急激に失ったが、喫煙習慣のある職員がライターを所持していたことから、ネクタイや発泡スチロールを燃料として着火して漂着した木材で焚き火を行い、建物の 3 階部分で暖を取ることができた。焚火によって極度の寒さに晒された身体が徐々に温まり、深夜になってようやく、家族や同僚職員の安否を気遣う余裕が生まれたとされている。この証言からは、極限状態における人間の本能的な生存行動と、当時の切迫した状況をうかがえる。

「あの日、防災対策庁舎で」と題された約 6 分間の映像には、屋上に避難して過酷な津波を生き延びた町職員たちの証言を収録しており、災害対応および被災経験の記録として貴重な内容となっている。加藤氏は、津波の襲来時にアンテナにつかまって必死に耐えていたが、強烈な波力に押し流され、背後の金属製の柵に衝突したという。水位は急激に上昇し、頭上まで達して呼吸困難となり、大量の海水を飲み込んだ結果、意識を失った時間もあったと回想している。屋上の職員たちは、アンテナの周囲に円陣を組み、膝まで浸水する中で住民をかばいながら奮闘したが、さらに大きな波が再度彼らを襲った。津波に流されながらも泳いで生還した三浦勝美氏は、次第に身体が流されて「鯉のぼりのような状態で腕の力だけで堪えた」ものの、指が支柱から一瞬離れてそのまま波にのまれたという記憶を語っている。三浦氏はその後、偶然にも海面に浮き上がった際に畳が近くにあるのを発見し、それに乗って志津川病院の鉄骨構造物に這い上がったことで、奇跡的に一命を取り留めたと証言している。当時総務課の佐藤裕氏は、激しい勢いで流される同僚職員の姿を目にし、「波が引いた後に彼らの姿が見えなくなっていた」ことで、言葉にできないほどの衝撃を受けた旨を述懐している。さらに、当時企画課課長補佐の及川明氏は、自身が津波に流されたという感覚すらないと証言し、3 階の落下防止用フェンスが全て水平方向に押し倒された瞬間を目撃したことがいかに異常な事態であったかに言及している。これらの証言は、津波襲来時の衝撃が極めて激烈であり、その場にいた職員や住民がパニック状態にあったことを如実に示している。加藤氏は、津波の直撃を受けた直後、身体の震えや痙攣が止まらず、3 階を見下ろした際に自暴自棄になったが、携帯電話のストラップに付けていた保育所に通う愛娘の写真を見て、「生きなければならない」と声を出し、自らを奮い立たせたという。三浦氏は、「10 年経っても東日本大震災のことを思い出さなかった日は一日もなかった」と述べ、今もなお、亡くなった同僚たちへの追悼の念を抱きながら日々を送っている。大怪我を負い血に染まりながらも焚き火で濡れた身体を温め、凍えるような長い夜を耐え抜いた屋上の生存者 10 人の強靭な体力と精神力を描いており、災害時における人間の生存本能と記憶の継承の重要性を示唆するものである。

最後の奥まった一角には厳かなアートゾーンを設置し、フランスの現代美術家、クリスチャン・ボルタンスキー氏（1944-2021）の遺作のひとつ《MEMORIAL》を展示している[17]。照明が抑えられた空間に浮かび上がるのは、時の流れを感じさせる風合いを持つ金属の箱（縦 23.5 ㎝×横 21.5 ㎝×高さ 9.5 ㎝程度）を積み上げて作られた大小さまざまな“塔”である。その姿は、静寂の中にそびえ立つ高層ビル群を彷彿させ、同時に、災害によって一度は壊れたものが、時を経て再び立ち上がろうとする“いのち”や“まち”の象徴のよう

にも見える。素材である金属の冷たさと無機質さが、かえって人間の存在の儚さや構造物の脆さを浮き彫りにしているが、同時に、それらを積み上げていくという行為そのものに、確かな“希望”や“再生”の意志を感じる。このインスタレーションは、3.11 の記憶をとどめるだけではなく、見る者に問いかけ、感情を揺さぶり、「私たちは何を失い、何を受け継ぎ、どう立ち上がるのか」という本質的なテーマへと導いてくれる。

ⅲ）上山八幡宮

南三陸町中央部の小高い丘に鎮座する「上山八幡宮」は、誉田別尊を主祭神とし、樹齢 300 年を超える堅木の古木が根を張る鎮守の森に包まれている。その社叢は、商店街、行政施設、住宅地に囲まれつつも、静謐な緑陰空間を形成し、生活の営みに寄り添う存在である。その起源は約 900 年前に遡り、かつては市街地中心部に位置していたと伝えられるが、1960 年のチリ地震の津波で旧社殿が被害を受け、1970 年に曳家工法を用いて従来地より高所にある現在地へ遷座した。境内には日本武尊を祀る古峯神社も併せて鎮座し、祭礼や年中行事の場として、住民にとっての心の拠点であり続けている。これは同時に、郷土の記憶と人々のつながりを再構築する宗教的・文化的結節点として、伝統行事の継承と地域文化の再生を支える空間的機能を担っていることを意味する。

中心市街地を壊滅させた東日本大震災の津波は、1927 年に建立された大鳥居の直前で止まり、社殿は奇跡的に被災を免れた。この出来事は深い象徴性をもって住民に記憶され、大鳥居の傍らに、「波来（はらい）の地」「東日本大震災　二〇一一年三月十一日」「贈　上山八幡宮　宮司　工藤祐允」と刻んだ石碑を建て、一面に次の言葉を記した。

「大津波がたどり着いた果て、波来（はらい）の地。犠牲者への鎮魂と慰霊の思いを込め、災いを祓い、復興支援者への敬意を払い、永久に注意を払いつづけることを願って、ここに刻む。」

境内に建立された石碑は、慰霊と祈り、記憶と誓いを同時に刻み込んだものであり、災害の風化を防ぐ記念碑的機能を果たしている。その存在は物理的構造物にとどまらず、震災の記憶を地域社会に継承し、災害をめぐる集団的記憶の形成を支える役割を担っている。震災以前より祈りの場であると同時に日常的な憩いの場として親しまれてきたが、震災以降はこれらの既存機能に加えて、震災に関する記憶を継承して共同体の再生に寄与するシンボリック・スペースとしての側面を色濃くした。古くからの社会的機能を維持しつつ、新たな意味づけを加えることで、多機能的な文化的資産として再定義されつつある。このような多層性は、信仰施設にとどまらず、地域社会の社会的・文化的インフラとして機能しうることを示している。当宮が位置する「上の山」は、周辺に平坦地が広がるという地勢的特徴のもとで、緊急時の迅速な避難を可能とする高所の地形的優位性を備え、地名そのものが“神の山”とも解釈可能な意味合いも帯びている。その存在は、地理的条件と宗教的意味が交差する地点に属することに意義付けられているといえる。

正に、上山八幡宮は、物理的な避難所としての潜在的機能と、住民の精神的拠り所としての役割を兼ね備えている。長年にわたり郷土の安全と祈りを担保してきた神域は、住民

が日常生活や労働を安定的に営むうえでの支柱となる。セーフティネットとしての実効的機能と宗教的・文化的拠点としての持続的役割を併せ持ち、自然環境への畏敬、信仰、災禍の記憶、復興への願いが織りなしている。物理的な安全と精神的な安心という“両輪”を護持し、南三陸の暮らしと文化を支える基盤として、この地に深く根ざしている。

（3）南三陸ホテル観洋における施設再建の過程と社会的価値の創出

ｉ）復旧・復興の過程と民間震災遺構「高野会館」の保存

「南三陸ホテル観洋」は、志津川駅から南に 3 ㎞の国道 45 号沿いに位置し、岸壁上から太平洋を見渡せる 10 階建ての白亜のリゾートである。5 階にあるロビー・ラウンジから窓一面のドラマチックな眺望が広がり、オーシャンビューの客室からウミネコやカモメが飛び交う様子が見られる。気仙沼市の水産会社、「株式会社阿部長商店」がホテル運営を行い、三陸沖で水揚げされた旬の食材を用いた料理も大きな魅力である。露天風呂と海が一体化しているかのような開放性を有するインフィニティ温泉では、地平線をなぞる光の輪郭を拝み、地下 1800ｍ以深から湧出する深層天然温泉に身を浸しながら、心身の安らぎを得ることができる。震災の教訓を語り継いで郷土の再生をけん引する、女将の阿部憲子氏は、「千年に一度の震災は、私たちにとってはもちろん、訪れた方々にとっても、千年に一度の学びの場。現地に足を運んで、見て、被災者の話を聴いていただくなかで、何かを感じ取っていただければ」と話している（渡辺 2014、p.50）。

このホテルは地震発生直後に停電および断水の被害を受け、下層 2 階部分まで浸水したものの、頑丈な岩盤の上に建っているため、地震動による物的損傷はほとんど認められなかった。しかし、町内に通じる橋が倒壊し、仙台方面への道路は倒木や瓦礫によって遮断され、一時的に孤立状態となった。3 月 17 日に宿泊者全員のチェックアウトを終え、3 月 23 日より複数のボランティア団体による支援活動の拠点として施設を共用する体制を整えた。医療巡回を行う医師および関係従事者に対し、宿泊室と食事の提供も始めた。4 月 15 日に電力が復旧し、5 月 5 日より 2 次避難先として約 600 人の被災者を受け入れ、フロア単位で班長を任命することで自治会を発足させた。自治会は定期的なミーティングや催しを実施し、避難生活における自治能力の向上と利便性・快適性を確保するよう促した。6 月 19 日からは、本や筆記用具、学習環境を失った子どもたちに学習機会を提供すべく、館内に臨時図書館を設置し、寄付された約 1 万冊の書籍を配架した。併せて、寺子屋形式の学習支援プロジェクトとして、そろばん教室や英会話レッスン等を始め、児童・生徒への学習支援を本格化した。特に、毎週火・木・金曜日の午後 4 時から 7 時まで開講するそろばん教室では、これまでに暗算検定 9 段の合格者を 4 人も輩出しており、地域社会に対する教育的・社会的貢献の具体例として高く評価されるものである[(18)]。

震災後における主な社会貢献のひとつとして、同町の中心市街地で 1986 年より運営していた冠婚葬祭場「高野会館」の民間震災遺構としての保存活動が挙げられる。この活動は 2015 年 2 月、同ホテルの阿部隆二郎・副社長、北淡震災記念公園総支配人や淡路市産業振興部長を歴任した宮本肇氏、市民団体「リメンバー神戸プロジェクト」の三原泰治・代

表の三者を共同代表として、「「高野会館」遺構保存プロジェクト」の立案に着手したことに始まった[19]。その後、2017 年 7 月に企画・計画書の検討を開始し、8 月に計画書および要望書を作成し、9 月に町役場に提出した。これを受けて、佐藤町長は 2018 年 2 月 16 日に正式な回答を示し、ホテルの責任のもとで高野会館を維持管理するよう求めた[20]。また 2018 年 12 月より、(1) 民間遺構としての説明表示板の設置、(2) 東日本大震災の津波高の標示、(3) 立入禁止板の設置、(4) 立入防止網の設置、(5) アスベストの撤去について指導した。2019 年 2 月、保存活動の活動報告会を開催し、2019 年 3 月には震災伝承施設（第 3 分類）に登録された。2020 年 2 月に阪神・淡路大震災と東日本大震災の遺構展を主催したほか、神戸市で歌による震災の語り部活動を続けている三原氏が 2021 年 1 月に作詞・作曲した「てんでんこ白い建物・高野会館」[21] を披露した。

写真 1　民間震災遺構「高野会館」

（資料）筆者撮影。

民間震災遺構「高野会館」（宮城　第 3-013 号）は、津波による影響で開口部（窓・扉）は失われているが、構造体が鉄筋コンクリート造であるため、白色を基調とする外観が現在もよく保たれている（写真 1)。天井や床の崩落の危険性があるため建物内部に立ち入ることはできないが、マロンブラウンライトのマーブルが壁面を覆うように配されており、その素材選定から高い意匠性と空間の格調の高さを読み取れる。河北新報社の報道[22]によると、志津川湾から約 300mの平地に立地していることから、発災直後に津波のリスクを察知した従業員らは､「頑丈なこの会館が崩壊するなら町は全滅する」｢生きたかったら、ここに残れ」と伝えて、帰宅しようとした人々をエントランス付近で制止し、館内にいた利用者を速やかに屋上に避難させる対応をとった[23]。1988 年の開館当初から勤めていた当時同館営業部の佐藤由成・部長は、設計段階から知り尽くしていた建物の強度に自信があり、屋上への避難を即決した。また、当時南三陸町社会福祉協議会総務課の猪又隆弘・課長は「お年寄りの足では途中で津波に遭遇してしまう」と判断した。地震発生から約 40 分後に高さ 15mを超える津波が直撃し、さらに繰り返し津波が押し寄せて屋上も 30 ㎝ほ

ど浸水した。四方を水で囲まれた会館を「まるで孤島のようだった」と発災時の状況を語る佐藤部長は、手帳に「午後 3 時 26 分、第 1 波。40 分引き始め」「4 時 13 分、第 2 波。28 分、引き方開始」「5 時、第 3 波。10 分、引き波開始」と書いた。しかし、2 ㎞ほど先の荒島までの海底が姿を現した様子を見て、「次の波が来たらみんな死んでしまう」と感じ、書く手が止まった。スーツの内ポケットに手帳を仕舞ったが、第 4 波は午後 5 時 32 分に襲来したものの、屋上部分は津波の大きな影響を受けずに済んだ。4 階にある約 25 ㎡と約 30 ㎡の 2 つの会議室に避難者を集め、廊下や更衣室にまで人が溢れるという過密かつ劣悪な環境となった。そのような状況下において、当日の夜間は、疲労と混乱の中で夜を過ごし、備蓄されていたペットボトルの水を小さなキャップで分け合うなどして互いに励まし合い、ようやく夜明けを迎えた。頑丈な構造を有する高野会館は、震災発生時に館内にいた高齢者芸能発表会の出席者と従業員、住民を含む計 327 人の避難者および 2 匹の犬の命を救ったという逸話を、後世に伝承する役割を担っている。

ⅱ）震災を風化させないための語り部バス

震災の記憶の風化を防ごうと、2011 年 4 月より『震災を風化させない語り部バス』(24)を毎日運行している。「震災と津波の跡地を案内するだけでは、その意義を十分に伝えられない」との認識のもと、現在見えるものと消失したものとを比較しながら理解を深めてもらうことを重視し、語り部自身の体験を写真資料や現地視察を交えて具体的に語ることを心がけている(25)。約 1 時間の行程では、語り部を務めるホテルスタッフが同乗し、各地の被災状況や防災・減災に関する教訓、瓦礫の陰に隠れた物語をわかりやすく伝える。2017 年 9 月には、「「震災を風化させないための語り部バス」による地域交流活性化の取り組み」として、第 3 回「ジャパン・ツーリズム・アワード」大賞を受賞した。本項では、2025 年 6 月 18 日に筆者が参加した通常コース【ホテル発→戸倉地区→民間震災遺構「高野会館」→旧防災対策庁舎→ホテル着】に基づき、記述を行う。ほぼ満席状態の中型観光バスに乗車し、S 氏のガイドを受けながら行程をたどった。なお、高野会館についてはホテル 5 階ブルーラインにおける資料の開架展示とパネル掲出（第 3 章第 3 節第 1 項）、旧庁舎については南三陸 311 メモリアル（第 3 章第 2 節第 2 項）で詳細な説明を行っているため、主に戸倉地区に焦点を当てて紙幅を割くこととする。

バスが出発すると、旧志津川町と旧歌津町との新設合併により、2005 年 10 月に南三陸町が発足した経緯の説明から語り始める。海の幸に恵まれた志津川湾では、ワカメ、ホヤ、銀鮭（養殖）、カキ、アワビ、タコなどが水揚げされ、これら水産資源の産地としての高い知名度を誇る。水鳥の重要な餌場でもあり、2018 年には海藻の藻場が日本初の湿地としてラムサール条約に登録されたことも紹介する。海岸線に沿って戸倉地区へと向かう道中、車窓から太平洋を望めるが、震災後に建設された堤防がしばしば視界を遮り、震災前とは異なる風景が広がっていることに気づかされる。まもなく、戸倉地区の中心部であった戸倉折立で一時停車すると、震災前に約 140 世帯の暮らしがあったことを説明する。車窓から周囲を見渡すと、緩やかな高低差のある草地が広がっているのみであり、かつて多くの

家屋が立ち並んでいた状況を想像することは難しい。進行方向左手前方の小高い地形を指し示しながら、そこに震災前の「戸倉小学校」が所在していたことを説明し、同校の体育館は震災直前の 2011 年 3 月 1 日に落成式が行われ、引き渡されたばかりであったという。ラミネート加工された震災当時の写真を乗客に提示し、鉄筋コンクリート造 3 階建て校舎の 3 階部分まで津波が到達した際に撮影された写真を用いて、津波襲来時の状況を説明する。加えて、津波が押し寄せる様子を捉えた写真と、車窓から望む穏やかな風景とを対比的に提示することで、この地を襲った想定をはるかに超える津波の破壊力を乗客が視覚的に理解できるよう工夫する。中でも、戸倉小学校[26]の津波避難行動に関する事例は示唆に富み、重層的な意味を持つエピソードとして、次の通り特筆される。

予てより、戸倉小学校の指定避難先は、校舎から北西約 400m の道のりの場所にある「宇津野高台」（海抜約 17m）であった。しかし、2009 年に着任した麻生川敦・校長は、地震発生から最短 3 分で津波が到達するという宮城県沖地震のシミュレーション結果が示されていたことなどをふまえて、この高台が避難場所として適切であるかについて疑問を抱いた。実際、校舎から高台への移動に 10 分以上を要することを確認し、この点を災害時の迅速な避難行動を阻害する要因と見なした。こうした背景のもと、麻生川校長は、校舎の耐震性の確保を前提条件としたうえで、校舎屋上（海抜約 11m）を避難場所とする変更案を職員会議で提起した。しかし、当時 1 年生担任であった斉藤早苗氏をはじめ、地元出身の教職員らは、この提案に対して慎重な見解を示した。屋上避難により一時的に生命の安全が確保できたとしても、津波の引きが遅れた場合には長時間にわたる孤立を招き、2 次避難が困難になる可能性を指摘した。特に、「地震が来たら、津波。津波の時は高台へ」という郷土に伝わる教訓を重視する立場から、変更案に対する強い懸念を示したのであった。1 年半にわたり教職員間で避難マニュアルに関する議論を重ねた結果、いずれにしても一長一短があるため、「屋上避難と高台避難に関する避難行動の選択」については、発災時に校長が最終判断を下すという方針で合意を形成した。

2011 年 3 月 11 日、5 分間の地震動が収まった直後、避難先の選択をめぐる決定権は麻生川校長に託された。教頭との協議を経て、校長は高台への直接避難を決断し、従来の校庭への 1 次避難を行わず、校舎玄関前で点呼を実施した後、速やかに国道 398 号を横断して高台へ向かうよう指示を出した[27]。この迅速な判断により、教職員および 91 人の児童全員が、午後 3 時までに安全確保のうえ高台への避難を完了した（図 3）[28]。教職員および児童らが高台から戸倉地区を俯瞰していると、午後 3 時 30 分頃に突如として耳をつんざくような轟音が響き渡り、住宅地が壁のように押し寄せる波に押しつぶされ、煙を上げながら次々と破壊されていく様子を目の当たりにした。津波が街を蹂躙する瞬間を目撃し、「この場所も危ないのではないか」という懸念の声が上がり、避難マニュアルに掲載されていなかったものの、一行はさらに高所にある「五十鈴神社」（海抜約 30m）の参道を進んだ（写真 2)。「戸倉保育所」の幼児や近隣住民らとともに境内へ駆け上がった直後、校舎は屋上を含めて津波に完全にのみ込まれ、1 次避難場所の高台も海面下に沈んだ。周囲は水に囲まれて境内が島のように孤立し、「神社までも津波が来るかもしれない」と危機感

をもつ中、担任らは境内の一番高い場所に児童を集めて「ここまで水が来たら木に登れ」などと指示した（麻生川 2012、p.20）。当日午後 4 時 25 分頃には高台が再び姿を現し、夕方からは降雪が始まり、夜間には気温が著しく低下した。こうした厳しい気象条件の下、避難者たちは神社の社殿に入って暖を取り、焚き火を囲んで身体を動かすなど、低体温症を防ぐための工夫を講じた。児童らは、卒業式で合唱予定であった『旅立ちの日に…』（作詞・作曲：川嶋あい）を歌い、眠らないよう励まし合って一夜を過ごしたという。震災後は、隣接する登米市に所在する旧善王寺小学校（廃校）を仮設校舎として使用し、2011 年 8 月 21 日には 5 か月遅れで卒業式を挙行し、卒業生 23 人に卒業証書を授与した[29]。式典にはシンガーソングライターの川嶋あい氏がサプライズで出席し、出席者全員で『旅立ちの日に…』を合唱して卒業を祝ったのであった。

以上のように、震災前における指定避難所の変更に関する議論から、五十鈴神社の高台への実際の避難行動に至るまでの経緯を時系列に沿って熱心に語る S 氏は、マニュアルへの過度な依存を避けた柔軟な判断力、日常的に涵養されていた高い防災意識、さらには土地に根ざした歴史的経験の継承といった要素を高く評価する。これらの要因が複合的に作用し、結果として全員の命が守られたことを心に刻む。

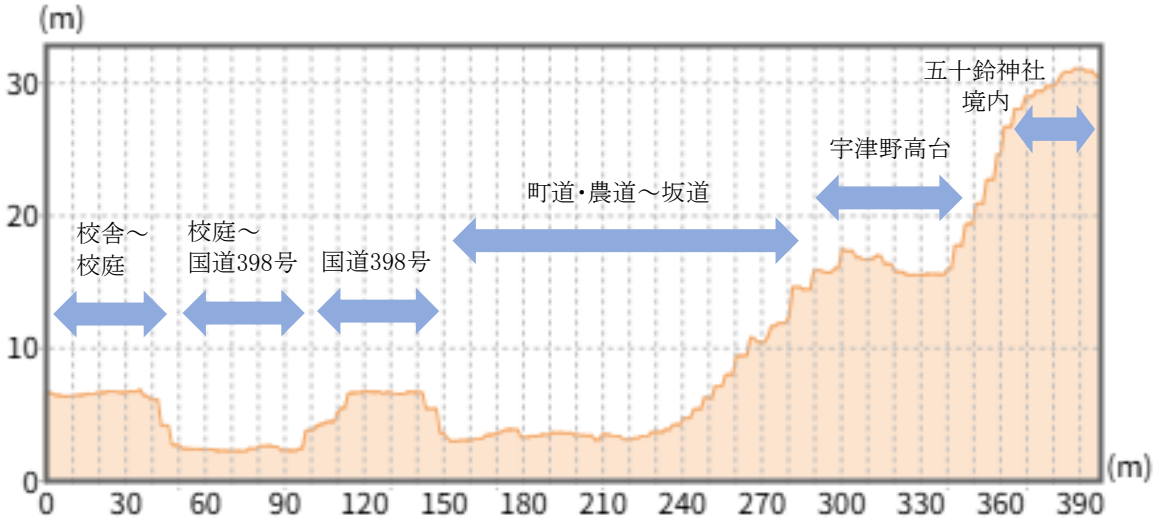

図 3　戸倉小学校があった場所から宇津野高台までの避難経路の距離と高低差

（注 1）震災前の「校舎～校庭」区間は、周辺の地形や写真等から推定し、海抜 1～2m 程度であったとみられる。
（注 2）震災前の「国道 398 号」区間は、同様に海抜 2～3m 程度であったとみられる。小学校の西側を南北に走っていた旧国道 398 号は、震災後に高盛土構造で造成された国道 398 号へと付け替えられた。
（資料）地理院地図を用いて筆者作成。

iii）海の見える命の森

南三陸ホテル観洋から国道 45 号を約 700m 北に向かうと、「海の見える命の森」（宮城第 3-025 号）に至る山道の入口がある。この森は、株式会社阿部長商店の所有地で、震災後に造成された低地から高台への避難場所である。慰霊・鎮魂と祈りの森、自然体験を通じて環境を守る持続的な教育活動を行う森、災害を学び命を守る防災・減災の向上を図る

森、住民だけでなく多様な方々が集い交流できる森を謳っている。山道はボランティアによって整備されているものの、道幅は 1 人がかろうじて通行できる程度で、無垢材を用いた手すりも設置されているが、一歩ふみ出すにはある程度の覚悟がいる。山道沿いの木々の枝には、ミャンマーからの訪問者によって結び付けられた無数の旗[30]が風にはためいている。駐車スペースから山道を進むと、木の根や丸太で組まれた 158 段の手製の階段を上ることになり、海抜約 80mの頂部までの所要時間は 10 分ほどである。山頂へと続く登山道は、当初は樹高の高い木々に覆われており、閉塞感や不安感を抱かせるが、中腹を過ぎる頃から道幅が広がり、視界が開けることで周囲の景観を楽しめるようになる。加えて、山頂が徐々に近づいているという期待感も加わり、時間の経過とともに身体的な負担よりも登頂の達成感が上回り、登りがいのあるハイキングコースとなる。

頂部には 30～50 人が座れるほどのベンチが置かれており、その場所に腰かけて軽登山の疲れをとり、東方に広がる三陸海岸と太平洋の絶景に癒される。東京・世田谷ライオンズクラブの寄贈により、2017 年 3 月に植樹とともに建立された高さ約 80 ㎝の石碑には、「伝えよ千年万年　津波てんでんこ」と刻んである。ボランティアによって開拓された頂部と尾根には、「今できることプロジェクト」の成果を見て取り、年度ごとに桜やヤマボウシ、ツツジなどの樹木を植樹し、それぞれの樹木の傍らに植樹記念の説明板や標柱を設置している。これらの説明板は、人の手によって簡易的に作成されたものであるため、経年による劣化が顕著である一方、樹木は順調に成長を続けており、説明板の風化と対照的にその生命力が際立つ構図が自然と形成されている。こうした状況は、開拓者の意図によるものではないが、まさに「万物流転」の趣を呈しており、人工物と自然との時間的対比を象徴的に示すものである。また、ピザ窯のある炊事場、バイオトイレ、5～10 人程度が宿泊できるロッジ、最大で 50 人程度が集える空間を山頂施設として整備している。

2016 年の「海の見える命の森プロジェクト」のスタート時からフィールド活動を率いてきた、三陸復興観光コンシェルジェセンター長の阿部寛行氏は、これまでに 3 歳から 86 歳までの 1 万 3000 人を超えるボランティアとともに雑木林を開拓・整備してきたことを誇る。そのうえで、「人類が自然を凌駕したと思い上がってはいけない。自然と向き合うことで、あらためて気付いたり、分かったりすることがある」「植樹した桜は千年咲き続けるという。海の見える命の森が、震災を千年後まで伝え続けられる場になれば」と話している（株式会社クリエイティヴエーシー編 2025、p.3）。

数ある構造物の中でもひときわ目立つのが、台座を含めて高さ約 5m、重さ約 7 トンの「南三陸大仏」である。2019 年 11 月に建立された碑文によると、「東日本大震災は私たちに沢山の気づきと学びを与えてくれた。生きるということはどんな事なのか、その命を支える仕組の礎には何があるのか。2 万人を超す大勢の犠牲があり、その気づきはあった。大自然の営みとその支えの中に私たちの生活があり、共に生きるつながりの中に生きる術がある」。こうした言葉とともに、ミャンマーの総合商社より白色大理石から精緻に彫刻された大仏像が寄贈され、太平洋を望める第一展望広場に安置された。災害の犠牲者の冥福を祈るための供養仏として、また今を生きる人々の暮らしと安寧を見守るシンボルとして、

太平洋を見晴らすこの高台の象意を担う存在として鎮座している。

さらに、この森林内に、高さ約 1mの木製の“モアイ”6 体が静かに佇んでいる光景は、深遠な余韻を感じさせ、鑑賞者に思索を促すものがある。実に、南三陸町に足をふみ入れると、街のあちらこちらに、これと同様の身の丈より小さいモアイが視線を遠くに投げている様子が目に留まる。その姿は、この地に生きる人々の時間の記憶を、無言のうちに見守っているかのようである。各所に立つ祖先の形象は、風にそよぎ、雨に打たれ、虫に蝕まれながらも、その場にとどまり続ける。木は、石のように“永遠”をかたどるのではなく、朽ちることをあらかじめ宿命づけられている。時の流れとともに風化し、ひび割れ、崩れかけたとき、人々の手が加わることで再び命を得る、そうした連続的な営みの中で、技術が伝えられ、精神が継がれ、文化が確かに守られていく。真に重要なのは、構造物そのものの永続ではなく、それを支え続ける人の手の継続にほかならない。

本家イースター島のモアイは石で造られ、悠久の風雨に耐える不変の実体である。人が岩盤に手を入れ、ひとたび像を彫り上げれば、それはもはや手を加える必要のない、不朽の存在として静止する。もし、あらゆるものが永遠に輝く黄金でできていたならば、初めに刻んだ先人たちの技術は称賛されても、それを次代に伝え続けることは容易ではない。石は時を超えて残るが、人の技は関わりがなければたちまち失われてしまう。木を用いることで“生きた関係性”が体現され、未来を紡ぐ者たちは否応なく自然と向き合い続けるだろう。こうして、南三陸の風に晒された木製の形代は、ただ存在するのではなく、朽ちていくことを通して守られるものがあることを教えてくれる。季節の移ろいを反映する山林に違和感なく佇むモアイは、その存在様態において人間の生の本質と通底するものを感じさせる。手が加えられ、修復され、やがて朽ちていくという循環の中、文明は絶えず呼吸を続ける。完成という静的な状態ではなく、常に生成・変化の途上にあるがゆえにこそ、真に尊いものとして捉えられる。

（4）戸倉地区における宇宙桜と未来へのまなざし—失われた学び舎と記憶の芽吹き—

ｉ）戸倉公民館

戸倉地区を訪れると、南三陸町内における 4 地区間の地震被害の差異を住家の罹災率という形で比較することで、被害の大きさを把握できる。具体的には、志津川地区が 73.8%、歌津地区が 50.2%、入谷地区が 1.5%であったのに対し、戸倉地区は 76.8%に及び、町内で最も高い罹災率を記録した。実際、志津川地区から国道 398 号を南下して戸倉地区に入ると、最初に戸倉折立の区域に至るが、現在は株式会社ケーエスフーズの第二工場が立地しているのみで、それ以外の大部分は広大な空地となっている。震災前は扇状に広がる地形に沿って多くの漁家が折立漁港周辺に集住していたことを知ると、現在の景観からこの地区を襲った津波の規模と破壊力を具体的に想起できる。他方、被害の大きさのみならず、震災後の復興の進展にも注目すべき点が多く、全壊した戸倉小学校および戸倉保育所は海抜約 50mの高台に移転・再建された。現在、それらに隣接するエリアには「町営戸倉復興住宅」や「戸倉復興公園」が整然と整備され、高台の宅地開発が進んでいる（図 4)。

図 4　戸倉地区の折立漁港周辺における震災前後と復興過程の空間変容

（注 1）A：戸倉折立（折立漁港のあるエリア）、B：宇津野高台、C：戸倉復興公園、①五十鈴神社、②戸倉小学校（震災前）、③戸倉保育所（同）、④戸倉中学校（同）、⑤志津川オリエント工業株式会社折立工場、⑥戸倉中学校仮設住宅、⑦株式会社ケーエスフーズ第二工場、⑧戸倉小学校（震災後）、⑨戸倉保育所（同）、⑩町営戸倉復興住宅、⑪戸倉公民館、⑫宇宙桜。

（注 2）震災後（2011 年頃）の写真は、東日本大震災後正射画像（2011 年 5 月～2012 年 4 月）。

（資料）地理院地図を用いて筆者作成。

海抜 14mの高台に建つ戸倉公民館を訪れると、かつては戸倉中学校の校舎であったことを知る。震災前は水産業を基幹産業に約 2400 人が暮らしていた同地区について、被害の概要をまとめた解説板があり、震災直後の戸倉小学校と戸倉公民館の写真を含めて、地図上にプロットされた地区内の浸水状況を把握する。震災後は校庭に 60 世帯を収容する「戸倉中学校仮設住宅」が建ち並んだ場所でもあり、現在は公民館として機能を保ちつつ、震災の記憶を宿す場として時の流れの中に存在している。入口前には、「絆は永遠に」と大書した石碑を 2014 年 3 月に建て、戸倉中学校閉校記念碑を並置している。碑の表には校歌、裏面には 1947 年の開校から 2014 年の志津川中学校との併合までの沿革を刻んでいる。それらは、この地区の暮らしとともにあった学校の営みと、その終焉、震災を経てなお残される“場所の記憶”を、石に刻むことで後世に語り継ごうとする試みである。

特に印象に残るものは、2 時 48 分で時を止めたまま校舎に掛かっているシチズン製の施設用電気時計である。震災発生時刻の午後 2 時 46 分を想起すると、それは津波によって電源が絶たれ、2 分後に完全に停止したものと推察される。今も当時のまま保存されており、“その瞬間”を物理的に刻印した震災遺物として、時間の流れから切り離された記憶の

断片を見せつけている。この場所は災害に対する認識を再考させる地点でもあり、津波は海側から直接襲ったのではなく、南側にある志津川オリエント工業株式会社折立工場の斜面に一旦ぶつかり、その跳ね返りが校舎と体育館の間を通って押し寄せたという。この逆流のような動きは「山から津波が来た」という言葉で郷土に記憶され、住民にとっては常識を覆すような体験であった。海抜 22.6mの地点に設けられた津波到達点のマークが建物 1 階の天井近くに位置することも、この土地の被害の大きさと特殊性を裏付けている。

この公民館は、公共施設以上の存在であり、震災前の教育の記憶、震災時の苦難、震災後の仮設生活、これからの防災の教訓までもが重層的に堆積し、ひとつの“災害文化の地層”として機能している。残された時計、石碑、そして語り伝えられる伝承は、土地そのものが語り部となって未来に語りかけているかのようである。こうした場を訪れ、眼に見える記録と眼に見えない記憶の双方に触れることこそが、震災を過去の出来事とせず、生きた学びへとつなげていく第一歩となるはずである。

ⅱ）宇宙桜

戸倉公民館の敷地内に、ひときわ静かに立つ一本の桜、「宇宙桜」がある。この“きぼうの桜”は、高知県仁淀川町にある樹齢約 500 年、樹高約 30mを誇る名木「ひょうたん桜（樹種：ウバヒガン）」の種子を起源とする。2008 年 5 月に同町の小学生により採取された 200 粒の種子は、アメリカ航空宇宙局（NASA）を通じて同年 11 月にスペースシャトル・エンデバー号に搭載され、国際宇宙ステーション（ISS）の「きぼう」日本実験棟（JEM）へと送られた。地球の周回軌道上をおよそ 4100 周し、2009 年 7 月、宇宙飛行士の若田光一氏とともに地球へ帰還したこれらの種子は、重力の外側から地球を見つめ、再び地上に根を下ろした。この地に芽吹いた宇宙桜は、宇宙を旅した種子の直系子孫として、地理的にも記憶的にも深い象徴を帯びた津波到達点に佇み、災厄の記憶を抱きとめるように、春には黙して花をひらく。傍らには「あなたにお願いがあります　この桜に祈ってください　すべての生きとし生けるものが　美しいこの星の上で　平安に暮らしていけることを」という祈りの言葉が添えられ、その言葉は人類全体に対する呼びかけのようでもある。

この桜に込められた意味は単なる植樹の域を超えている。宇宙という極限環境を旅し、地上に戻ってもなお発芽したごくわずかな命、その稀有な経験は、まさに未曽有の災害となった 2011 年を生き延び、語り継いできた被災者の生と重なり合う。語り部として証言を残す人々が徐々に姿を消していく未来においても、この桜は風雪に耐えながら生き続け、無言のまま語りつづけるだろう。自然災害の脅威と、それを乗り越える人間の強靭さ、その両方をその身に宿す宇宙桜は、詩人ゲーテが「自然とは、常に真実であり、常に厳粛・厳格である」と語ったように、自然そのものの中に人間の記憶と祈りを封じ込める器となっている。一本の桜はもはや植物としての桜ではなく、記憶を受け継ぐ“生きたモニュメント”であり、時代を越えて人間の魂の軌跡を刻み続けるものである。

太平洋を一望できる展望地点には、「3.11　未来へつなぐ命のバトン」と刻まれた高さ約 2mのモニュメントを設置している。太平洋を望む高台に設置されたメモリアルアートは、

巨大な虫メガネを模した造形を有している。中央のレンズ部分には実体としてのレンズは存在せず、むしろ空虚な枠が空間を切り取り、鑑賞者の視線を大海原へと導く。その枠越しに見る風景は、ただの眺望ではなく、一幅の絵画としての自然、あるいは自然が語りかける息吹の姿として現前する。この構造物は、風景を背景としてではなく、人間の感性と共鳴する主体として提示する装置であり、常に客観的な真理と法則を内包する自然の理を視覚的に体現している。その枠組みは、いわば視線を導く額縁として機能し、鑑賞者に“見ること”と“感じること”の交差点を提供する。その意味でこれらの構造物は、“ランドスケープ・アーキテクチャ”における“ビューフレーム”としてだけでなく、自然との内的対話を促す詩的構造物としても位置付けられる。

ⅲ）五十鈴神社

五十鈴神社の創建年代は明らかではないが、当地の古老・佐藤十右衛門の伝承によれば、その祖先が伊勢神宮参拝の折に神璽を奉載し、これを祀って守護神としたことに創祀の起源を求めることができる。明治時代に入ると、折立の産土神として住民の篤い崇敬を集めるようになり、1947 年には保々倉神社を合祀した。境内の一角には、風雨に晒されながらも凛と佇む約 20 基の庚申塔などの石碑群が存在し、航海・交通の安全や身体健全・無病息災を祈願している。これらの石碑の多くは、100 年以上にわたりこの地に立ち続けており、単なる石造物にとどまらず、時代を超えて子孫の安全を見守り、訪れる者を導く道標の役割を果たしている。まだ生まれていない未来の誰かがこの時代を想起し、風や木の葉のささやき、遠くの青空として苦悩や迷いを断ち切る力を授かる空間である。未来という名の手紙が未だ封を解かれぬまま手の中に静かに置かれているかのようであり、その重みは微細かつ静謐である一方、胸の奥にあたたかな光を灯す霊域である（写真 2)。

古い石碑群のある場所から山道を 30 秒ほど登ると、朱色の一の鳥居が建っており、その傍らに 2012 年 11 月に建立された東日本大震災記念碑（寄贈者：三浦賢三）がある。この記念碑は高さ約 130 ㎝、横幅約 180 ㎝で、地震発生から約 40 分後に戸倉地区をのみ込んだ巨大津波の被害状況を記録している。同地区の折立における津波浸水高は 23ｍにも達し、死者・行方不明者は 39 人、全壊戸数は 130 戸に及んだことを伝えている。これほどの高所にまで津波が到達したという事実を記録・保存し、「未来の人々へ　地震があったら、この地よりも高いところへ逃げること」との注意喚起の文言を大きく刻んでいる。この記念碑から石段を 40 段ほど登ると、天照大神が鎮座する五十鈴神社の社殿に至る。階段を上り終えた地点の傍らには、かつて石灯籠が建っていたと推察されるが、地震の影響により地輪や柱のみが倒壊したまま残存している。周囲は杉林に覆われており、およそサッカーコート半面の広さの平坦な整地となっている。

この地に刻まれた記憶を再び手繰り寄せると、震災発生日の夜は雪がゆっくりと降り続き、気温は 0 度を下回った。麻生川校長らが周囲を巡回して状況把握に努めたものの、病人や負傷者、妊婦、幼児の移動は、繰り返される余震および津波の再来の危険性をふまえると極めて困難であった。そのため、戸倉小学校と戸倉保育所の関係者に加え、近隣住民

を含む計約 150 人が境内に留まり、一夜を過ごす判断がなされた。妊娠中の教員や小学 4 年生以下の児童が優先的に社殿内へ避難し、寒さを凌いだが、それ以外の避難者と高学年の児童約 50 人は野宿を余儀なくされた。暗闇に包まれて不安が増す中、嗚咽を堪えて涙を流す友人たちの姿も見られたが、東京を拠点に活動しているピアニストの小野寺みなほ氏（当時、戸倉小学校 6 年生）が夜空を見上げると、それまで見たことのない数の星が輝いていたという。すると教師たちが「理科の授業だ。あの星座は何だ」と即席の野外授業を始め、焚き火を起こして児童の不安を和らげた。命をつなぐ火のそばに学校から持ち込んだ布団を敷き、児童らは交代で身を寄せ合い座った。夜も更ける頃には、6 年生が卒業式で歌う予定だった『旅立ちの日に…』を口ずさみ始め、やがて夜空を仰ぎながら皆が大きな声で合唱したと伝えられている[31]。

写真 2　五十鈴神社への参道

（資料）筆者撮影。

４．おわりに

本研究は、宮城県南三陸町における震災遺構および伝承施設に着目し、「ダークツーリズム」の視点からその観光地化の過程と特性を明らかにすることを目的とした。被災地における観光を、「被災から復興へと至るプロセス」として位置づけ、物理的遺構の保存・整備に加え、ワークショップや対話、住民との交流、追悼や祈りの要素を含む体験型観光の全体像を把握し、観光が“総合的な復興”に果たす役割について分析を行った。

「南三陸町震災復興祈念公園」内に位置する「旧防災対策庁舎」は、東日本大震災の津波被害を今に伝える唯一の建造物として保存されている。多数の犠牲者を出した施設として、保存をめぐる議論を経て、県と町の管理下で維持されてきた。2024 年には、佐藤仁・町長の主導のもとで町有化され、災害記憶を後世に継承するモニュメントとして再定義された。また、被災者の祈りを刻んだ石碑の建立や植樹が進められ、記憶保存、自然との共生、復興への意志および郷土のレジリエンスを象徴する空間となっている。

祈念公園と道の駅・さんさん南三陸を結ぶ歩道橋「中橋」は、震災前に存在した木橋の意匠を想起させるデザインと、南三陸杉を用いた温かみのある構造設計を特徴とし、両者をつなぐ機能的役割に加えて、復興の象徴として整備された。また、「南三陸 311 メモリアル」は、東日本大震災の記憶と教訓を次世代へ継承する拠点として、町の復興過程や住民が思い描く未来像、支援者との関係性などを多角的に表現している。館内には被災当時の写真やエピソード、被災者や語り部の証言、震災前の街並みの記録等を展示し、極限状態に置かれた旧防災対策庁舎に関する概要と、生存者の証言も併せて紹介している。物理的な復興が進展する中、震災に関する記憶継承の中核的役割を担い、住民と旅行者を結び付けるとともに、防災意識の喚起を目的とした教育的空間として機能している。

「南三陸ホテル観洋」は、被災者の受け入れをはじめ、ボランティア活動の拠点化、医療従事者に対する宿泊支援、子どもへの学習機会の提供など、複合的な社会貢献活動を展開してきた。かつての冠婚葬祭場「高野会館」を民間震災遺構として保存し、津波に関する記憶継承の取り組みも進めている。2011 年 4 月より毎日運行する「語り部バス」では、被災時の状況や被災地の変遷、復興過程などを語り継ぐことで、震災の記憶の風化を防止する試みを継続している。加えて、高台に造成した「海の見える命の森」では、追悼、防災教育、自然体験を統合した場として供用し、多様な来訪者の交流を促進している。

町内で最も高い罹災率を記録した戸倉地区では、震災後には旧戸倉中学校の校舎を転用した「戸倉公民館」が設置された。同館は、中学校の記憶、避難所の機能、震災の記憶を継承する場として、多層的な意味を内包している。また、「宇宙桜」は、宇宙空間を旅した種子を起源とする希少な苗木であり、災厄を乗り越えて開花する“生きたモニュメント”として、未来への祈りと希望を象徴している。五十鈴神社には、津波の到達を記録する石碑や庚申塔が建立されており、震災当夜に児童らが雪の中で焚き火を囲み、合唱した記憶とあわせて、過去と未来をつなぐ精神的支柱としての役割を担っている。

［注］

（1）物理的・社会的構造に焦点を当てる従来の地理学に対する一分野。ここでの“感情”とは、身体的・空間的な経験を通じて生まれる非言語的な感覚や雰囲気を含む概念である。こうした感情が空間にどう刻まれ、再生産されるかを分析する。特に、悲しみや希望などの感情を喚起する場所、身体的行動（例：彫刻、祈り）として感情表現される場所、旅行者と住民が感情的共鳴を生む災害や死の現場などを研究対象とする。

（2）2025 年 8 月 31 日現在の南三陸町の人口は、1 万 1264 人（住民基本台帳）である。

（3）海抜約 1mの低地に位置している。1960 年のチリ地震で約 5.5mの津波が町中心部を襲い、県内最多となる 41 人が犠牲となったことを教訓として、庁舎 1 階部分の浸水を想定し、災害対策本部を 2 階に設置していた。津波で流失した行政第一庁舎（町長室、副町長室、総務課、企画課、町民税務課等）と行政第二庁舎（産業振興課、建設課等）との間に建っていた。現在、建物東側のかつての入口付近に献花台を設けている。

（4）2 階の放送室より防災行政無線を使って住民に避難を呼びかけ続けた危機管理課課長補佐の三浦毅氏と、同課の遠藤未希氏が行方不明となった。同課職員 5 人のうち両氏が行方不明、課長は亡く

なった（読売新聞（2011 年 4 月 19 日）「「避難して」防災無線　最後の声　命救った　南三陸 2 職員今も不明」『読売新聞』東京朝刊 2 社、p.34）。その後、埼玉県は、24 歳で犠牲となった遠藤氏らを題材にした「天使の声」を 1 編とする道徳教材『心の絆』（全 12 編。本文 44 頁）を作成し、県内の公立学校に配布した（読売新聞（2012 年 3 月 9 日）「命救った声語り継ぐ　避難放送後津波で犠牲　遠藤さんの物語朗読会」『読売新聞』東京夕刊 2 社、p.16）。

（5）読売新聞（2024 年 3 月 2 日）「南三陸　旧防災庁舎保存　戸惑いも　町長、突然の方針表明」『読売新聞』宮城、p.27。

（6）読売新聞（2024 年 7 月 2 日）「津波の痕跡　伝承に活用　南三陸旧防災庁舎　町有化」『読売新聞』宮城、p.23。

（7）全文は次の通り。「小学 1 年生だったあの日、この目で見たものはまだ私の中で鮮明に生き続けている。どうかこの町が大好きだったあの日のように活気と人々の笑顔であふれる町になりますように。」。

（8）次の定式により確認を要する。津波高＝地表の標高＋津波浸水高。

（9）志津川湾に浮かぶ海抜約 46 m の陸繋島。頂部に少童命を祀る「荒嶋神社」が鎮座し、古くから弁財天の島として漁業者を中心に信仰を集めている。1937 年に防波堤が完成し、歩いて渡れる島として一般開放されている。2019 年、寄付金により流失した大鳥居の再建を果たし、津波の記憶を伝えるべく以前の大鳥居の根幹部を残置している。

（10）津波に見舞われても生き残ったツバキの逞しさに倣い、西宮ロータリークラブと南三陸椿くらぶ・復興みなさん会が 2020 年 10 月、南三陸町震災復興祈念公園の開園記念植樹にあわせて 43 本のツバキを寄贈した。それらをこの場所に植樹したことを知らせるポールが立っている。

（11）佐藤町長は、仙台商業高校（東北地方代表）の正遊撃手として、1969 年に開催された第 51 回全国高等学校野球選手権大会に出場した。同年のドラフト会議でヤクルトに 1 位指名されてプロ入りを果たした八重樫幸雄らとともに熱戦を繰り広げ、ベスト 8 の座をつかんだ。

（12）有料ゾーンの一部には「ラーニングシアター」を併設し、来館者が自然災害を自らの問題として認識を深めることを目的としたコンテンツを提供している。当該コンテンツでは、住民の証言映像を視聴した後に、「もし自分がその場にいたらどう考え、どのように行動するか」について、他の参加者と対話しながら考察を深める機会を設けている。

（13）2020 年末までに県内で捜索に携わった警察官は、延べ約 14 万 8000 人に上った。

（14）震災発生直後から翌 3 月 12 日にかけて旧防災対策庁舎で生じた出来事については、山村（2017）による先行研究に加え、河北新報社が 2021 年 2 月 21 日から 28 日にかけて第 1 面に連載した特集「ドキュメント　防災庁舎」（全 8 回）で詳細に報じている。11 人の生存者の証言を中心に、極度に過酷な状況下での意思決定、心理的葛藤、ならびに救助活動の経緯を、時系列に沿って描出した。この企画を通じて、被災地の現実を可能な限り具体的かつ多面的に伝えるとともに、その背後にある人間の営為や苦悩をも描き出すことを企図した。

（15）設計上、この場所は屋上部分よりも約 50cm 高くなっている。わずかな高低差ではあるが、この場所に避難していた 8 人が生存したという事実は重要である。

（16）「畳に乗って生還した男」と記録された三浦勝美氏（当時町民税務課）（山村 2017、pp.158-168）。

（17）2019 年 6 月に南三陸町が作品制作を依頼した。ラーニングプログラム制作と展示ディレクションを担当した、演出家の吉川由美氏によると、ボルタンスキー氏は震災直後に東北地方を訪れており、制作依頼のために同氏のもとを訪れると、「もうイメージはできている」と語ったという。吉川氏は「彼の作品の、あの違和感。逆説的に人間の尊厳を問う圧倒的な空間です。ユダヤ人でもある彼は普遍的な課題として人間の命の尊厳を問い続けました。震災の問題だけに矮小化せず、人間

にとって生きるとはどういうことかを問い続ける。そんな施設であるためのアート空間です」と評価している（南三陸町 2024、p.368）。

（18）南三陸ホテル観洋が発行する広報誌『KANYO』2021 年 4 月号参照。現在も約 50 人の児童らがホテル内でそろばんを習っている。

（19）三原氏は、戦災と震災に耐えた神戸市長田区の市場の延焼防火壁を震災遺構として残す活動に尽力し、兵庫県淡路市の北淡震災記念公園に「神戸の壁」（高さ約 7m、幅約 14m）として保存を果たした。遺構の保存活動だけでなく、歌による継承にも取り組み、阪神・淡路大震災をテーマにした 14 曲の作詞・作曲に携わった。

（20）回答は以下 5 点であった。（1）南三陸ホテル観洋の責任において高野会館の維持管理を求める。（2）震災遺構の保存に対する国の財政支援は、1 市町村 1 物件であり、南三陸町は「旧防災対策庁舎」をその対象としている。したがって、高野会館を町の一般財源で保存する考えはない。（3）高野会館周辺の道路等整備については、当該施設への進入路や片側の歩道を設けている。環境が整えば、周辺の町有地を有償で貸し付けることができる。（4）有事の際の避難については、原則として徒歩で川を渡ることなく避難する方針である。そのため、八幡川西側の地域の避難は国道 45 号から志津川高校方面へ誘導する。（5）国道 45 号は防潮堤より高く、津波から二重で防御する機能が備わっている。国道路体にトンネルを抜くことは、この防災機能を大きく低下させる。加えて、鎮魂と防災の回廊としての整備は実施しないため、国道 45 号にトンネルを設置することはない。

（21）3 番まである歌詞の 1 番は、次の通り。「あの日　海辺の白い建物　みんながつどって　楽しんでいた　地震だ　津波がくるぞー　屋上への声で　みんなの　命を守った　てんでんこ　てんでんこ」（神戸新聞（2023 年 2 月 9 日）「東北の震災遺構　歌の力で守る　被災者救った建物保存支援」『神戸新聞』、p.17）。

（22）河北新報（2011 年 6 月 23 日）「ドキュメント大震災　逃げるその時 3　「生きたかったら残れ」従業員ら仁王立ち」『河北新報』、p.23。

（23）頑丈な高野会館はこのエリアの 1 次避難場所に指定されており、従業員は定期的に避難訓練を行っていた。また、各階に緊急用の物資を備蓄していた。

（24）通常コース（8:45 発、60 分）と高野会館特別コース（10:15 発、90 分）がある。出発日前日の 21 時までにホテルフロントに申し込む。通常コースは大人 500 円、小学生以下 250 円（宿泊者・利用者に限らず、1 名から参加可能）。2011 年からの利用者数は、延べ 47 万人に上っている。

（25）女将の阿部憲子氏は「野原みたいになった町を見て「ここはもともと更地だったのですか」という質問をされる方もいました。震災のことを話すのと同時に、南三陸の以前のことも伝えなければ、町にあった暮らしの風景がなかったことになってしまう。そう感じたので、津波の爪あとがまだ残っているうちに活動を始めました」と語り部バスの端緒を述べている（南三陸町 2024、p.360）。

（26）校舎は、折立浜から約 300m内陸に位置し、町のハザードマップのレッドゾーンに建っていた。1960 年のチリ地震で校舎 1 階が水没したことを教訓とし、「地震が来たらすぐ津波、津波が来たらすぐ高台、物はいらない、まず命」など、覚えやすい言葉で避難の心得を伝えてきた。

（27）なぜ、麻生川校長は持論であった「屋上避難」を取り下げ、「高台避難」を選択したのか。朝日新聞の三浦英之・記者が質したところ、麻生川校長の回答は「それはもう直感で」「揺れがあまりにも大きすぎたから」「ただ運が良かった」など直感的・本能的なものであった。また、未就学児は高台までの移動に時間を要するため、戸倉保育所は隣接する戸倉小学校の屋上を避難場所に定めていたが、同所も同様に高台への避難を選んだ（三浦 2024、pp.109-112）。危機的状況下において、訓練や理論に裏打ちされた即応的な判断力・行動力や、感覚刺激に対する感受性の向上、自身の生存や他者の安全を希求する強い意志の重要性を示している。

（28）ただし、宇津野高台へ避難した後に自宅に戻った教員 1 人と、下校した後に自力で高台に避難した 2 年生 1 人が津波の犠牲となった。

（29）保管されていた金庫ごと津波に流されたため、泥にまみれた状態で回収された卒業証書が児童に手渡された。6 年生担任の市村俊幸氏は、証書の汚れをブラシで落とそうと試みたが、完全にきれいにすることは難しかった。しかし、保護者の中からは、泥のついた証書のままでよいとの声が寄せられた（読売新聞（2021 年 3 月 1 日）「不安な夜　温めた合唱　卒業 1 週間前に被災　南三陸・戸倉小の 23 人」『読売新聞』仙台、p.29）。

（30）旗のサイズは縦約 23 ㎝、横約 15 ㎝。色は青、黄、赤、白、ピンクで構成されている。

（31）朝日新聞（2024 年 8 月 1 日）「（てんでんこ）屋上か高台か：3　雪の夜更け、山頂で歌った「旅立ちの日に…」」『朝日新聞』社会総合、p.27。

［参考文献］

麻生川敦（2012）『南三陸町立戸倉小学校　避難と復興の記録』南三陸町立戸倉小学校

井出明（2010 a）「災害復興と観光―その類型化と目指すべき方向性―」深見聡・井出明編『観光とまちづくり―地域を活かす新しい視点―』古今書院、pp.186-202.

井出明（2010 b）「復興観光とアートマネジメント」深見聡・井出明編『観光とまちづくり―地域を活かす新しい視点―』古今書院、pp.203-213.

石井山竜平編（2021）「インタビュー「かもめの虹色会議」で守った渚をこれからに活かす―「いのちめぐるまち」づくりのこれまでとこれから―工藤真弓・鈴木卓也・太齋彰浩」『月刊社会教育』65（7）、pp.3-11.

株式会社クリエイティヴエーシー編（2025）「自然と共生、風光明媚な場：海の見える命の森」『伝承ロード縁』2025（3）、pp.2-3.

Kato, K. (2022) “Debating Sustainability in Tourism Development: Resilience, Traditional Knowledge and Community: A Post-Disaster Perspective,” Sharpley, R. and K. Kato eds. (2022) *Tourism Development in Japan: Themes, Issues and Challenges*, London: Routledge.

河内良彰（2024）「岩手県宮古市におけるダークツーリズム―「津波遺構たろう観光ホテル」を中心として―」『社会学部論集』79、pp.63-86.

Lin, Y., M. Kelemen and R. Tresidder (2018) “Post-Disaster Tourism: Building Resilience through Community-Led Approaches in the Aftermath of the 2011 Disasters in Japan,” *Journal of Sustainable Tourism*, 26 (10), pp.1766-1783.

Martini, A. and C. Minca (2021) “Affective Dark Tourism Encounters: Rikuzentakata after the 2011 Great East Japan Disaster,” *SOCIAL & CULTURAL GEOGRAPHY*, 22 (1), pp.33-57.

南三陸町（2024）『南三陸町東日本大震災記録誌』南三陸町

三浦英之（2024）『災害特派員　その後の「南三陸日記」』集英社

Stone, P. (2006) “A Dark Tourism Spectrum: Towards a Typology of Death and Macabre Related Tourist Sites, Attractions and Exhibitions,” *Tourism: An Interdisciplinary International Journal*, 54 (2), pp.145-160.

Tan, X. et al. (2022) “Residents' Involvement in Disaster Tourism as a Practice: The Case of an Islam Destination, Aceh,” *Annals of Tourism Research*, 96, pp.1-14.

渡辺恵美（2014）「復興への道：Road to Recovery（Episode 30）観光業の特長を生かした復興支援 株式会社阿部長商店 南三陸ホテル観洋（宮城県本吉郡南三陸町）「千年に一度の学び」を通して観光業として可能な支援に取り組む」『厚生労働』2014.9、pp.48-50.

山村武彦（2017）『南三陸町　屋上の円陣―防災対策庁舎からの無言の教訓―』ぎょうせい

The Tourism Development of Disaster Memorial Facilities and Narrative Formation in Experiential Tourism: Recovery Processes and Emerging Trends in Dark Tourism in Minamisanriku, Miyagi Prefecture

KOUCHI Yoshiaki
Bukkyo University

This paper examines the process by which tourism has been reshaped in Minamisanriku Town, Miyagi Prefecture, through the lens of dark tourism, with a particular focus on remnants of the Great East Japan Earthquake and disaster memorial facilities. It conceptualizes tourism in disaster-affected areas as a process transitioning from devastation to recovery, and considers not only the preservation and development of physical sites, but also the therapeutic and social impacts of interactive and experiential content on both visitors and local residents. In doing so, the study explores the role tourism plays in contributing to what may be termed a "comprehensive recovery."

Under the leadership of the town's mayor, the former Minamisanriku Disaster Prevention Office—one of the few remaining physical traces of the disaster—was transferred to municipal ownership and preserved as part of the Minamisanriku Memorial Park of Earthquake Disaster. The establishment of a memorial monument and tree-planting initiatives have created a space that symbolizes both the memory of the disaster and the collective will to rebuild. The Minamisanriku 3.11 Memorial functions as a site of memory transmission, serving to foster disaster preparedness and awareness through resident testimonies and archival materials. These facilities act as points of connection between tourists and community members, offering both spiritual resonance and educational value.

Minamisanriku Hotel Kanyo, which served as an evacuation center and logistical support base in the immediate aftermath of the disaster, has played a multifaceted role in memory preservation and community engagement. Initiatives such as the preservation of Takano Kaikan as a private disaster heritage site, the ongoing operation of a storyteller bus tour, and the development of the Forest of Life with a View of the Sea have contributed to the creation of interactive spaces that promote remembrance and dialogue. In the Togura district, the reuse of the former Togura Junior High School as the Togura Community Center, alongside symbolic sites such as the Space Cherry Blossoms and Isuzu Shrine, exemplifies efforts to link the memory of the past with hope for the future. These sites function as spiritual and cultural anchors within the community.

Minamisanriku's approach to recovery extends beyond physical reconstruction. The town has promoted a more holistic recovery by advancing policies and educational initiatives grounded in disaster preparedness and mitigation, constructing archives, reconstructing local identity, and creating spaces for memory transmission that include elements of mourning and prayer. This comprehensive approach to recovery serves as a potential model for integrating tourism into long-term post-disaster resilience strategies.